【参考資料】

［１］地域の概況

（１）茨木市の位置・地勢・気候

①茨木市の位置・地勢

本市は、淀川の北、大阪府の北部に位置し、大阪市と京都市のほぼ中間に位置している。

北は京都府亀岡市、東は高槻市、南は摂津市、西は吹田市・箕面市・豊能郡豊能町にそれぞれ隣接している。市域は、東西 10.07 ㎞、南北 17.05 ㎞の南北に長い地形をしており、市域面積は 76.49 ㎢である。

主要な河川には、安威川・佐保川・茨木川・勝尾寺川・大正川があり、市の中央部を流れる佐保川は、中流で勝尾寺川と西河原で合流して茨木川となり、北部を源とする安威川と合流している。また、市域の南西部では、大正川が摂津市域に流れている。

なお、市域中南部及び北部に位置する彩都を中心に、約 33.98 ㎢が市街化区域に指定されている。

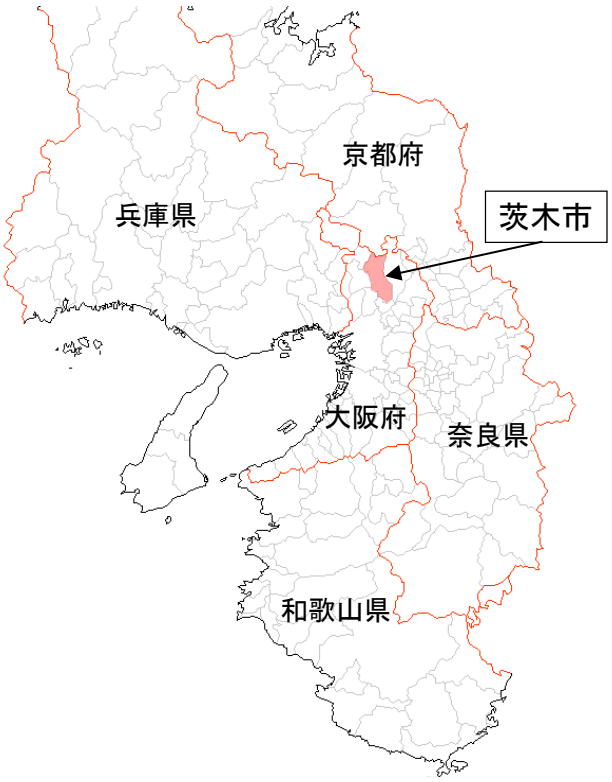


図 12-1　茨木市周辺図

②広域交通ネットワーク

市内には名神高速道路、新名神高速道路、近畿自動車道のほか、国道 171 号、大阪中央環状線など多くの国土幹線や広域幹線道路が走る。

鉄道は、ＪＲ東海道本線（茨木駅、ＪＲ総持寺駅）や阪急京都線（茨木市駅、南茨木駅、総持寺駅）が並走し、市内を走る大阪モノレールには、本線と彩都線（宇野辺駅、南茨木駅、沢良宜駅、阪大病院前駅、豊川駅、彩都西駅）が整備されている。

また、ＪＲ茨木駅は快速、阪急茨木市駅は特急・通勤特急の停車駅であり、新幹線が発着するＪＲ新大阪駅へはＪＲ茨木駅から約７分、大阪国際空港（伊丹空港）へは大阪モノレール南茨木駅から約 24 分でアクセスが可能であり、多くの広域幹線軸が交差する交通の要衝となっている。

③気候

市域の北半分は、丹波高原の老の坂山地の麓で、南半分には大阪平野の一部をなす三島平野が広がっている。気候は穏やかな瀬戸内気候区に属し、日照が多く比較的温暖な気候に恵まれている。

なお、本市の令和４年の気象に関するデータは下記の通りである。

年間平均気温：17.5℃

最高月平均気温：29.5℃（令和４年８月）

最低月平均気温：5.5℃（令和４年２月）

降水日数（1 ㎜以上）：87 日

年間降水量：1058.0 ㎜

表 12-1　日平均気温と合計降水量

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年合計	年平均
日平均気温（℃）	5.6	5.5	11.4	16.8	20	24.4	28.4	29.5	26.2	19	15.2	7.9	－	17.5
合計降水量（㎜）	23	15	100.5	125	77.5	147	198.5	205.5	213	89.5	108	18	1321	110.0
月別降水日数	2	2	8	9	9	7	10	11	11	6	7	5	87	7.3

※降水量・降水日数については茨木観測所のデータを引用、気温については枚方観測所のデータを引用

（出典：気象庁）

④自然・公園・緑地

市北部は、棚田が広がり、農業の場であるだけでなく、美しい景観が広がっている。準絶滅危惧種であるオオタカ等の野鳥の他、多様な動植物が生息している。また、複数の自然歩道が通っており、豊かな自然を身近に感じることができる。

市中心部は、桜をはじめ 40 種類以上約７万本の樹木が植えられた全長５㎞にも及ぶ元茨木川緑地が位置しており、毎年春には「茨木市民さくらまつり」が開催されている等、市民の憩いの場として親しまれている。

他にも、市の花であるバラを 180 品種、1750 株を有する「若園公園バラ園」が市南部に、また、水と緑を身近に感じることのできる本市初の防災機能を備えた西河原公園が整備されている。

清渓地区の棚田（北部地域）

茨木市民さくらまつり（元茨木川緑地）

（２）茨木市全体及び中心市街地の沿革（まちの成り立ち）

①茨木市全体の沿革

俯瞰した茨木市

本市は歴史上早くから拓けた地域で、古くは弥生時代から多くの人々が生活し、その跡が残されている。なかでも東奈良遺跡から発見された銅鐸の鋳型は有名であり、古墳時代を通じて各時期の古墳が数多く残されている。平安時代には、市域中央部を東西に走る街道の往来が盛んになり、室町時代には、茨木城が築かれたと考えられている。江戸時代になると参勤交代などで大名らが郡山宿本陣（椿の本陣）を宿泊に利用し、現在も、西国街道沿いに建つ本陣は、往時の面影を残している。また、北部地域には「聖フランシスコ・ザビエル像」などの遺物が発見された千提寺、下音羽の隠れキリシタンの里などが今に伝わっている。明治４年（1871 年）には、廃藩置県により大阪府の管轄となり、後の郡制の実施で、明治 31 年（1898 年）、三島郡に属した。この年の 10 月、茨木村は茨木町となり、その中心地として栄えた。

明治以降は、三島郡の行政・経済・文化・教育の中心地であり、豊かな米作地であった。昭和 23 年（1948 年）１月には、茨木町・春日村・三島村・玉櫛村の１町３村が合併し、茨木市が誕生し、その後、８か村の合併、編入を経て、現在に至っている。

また、本市は、明治９年（1876 年）に国鉄茨木駅が開設され、昭和３年（1928 年）に阪急茨木市駅、昭和 11 年（1936 年）に阪急総持寺駅が開設され、大阪市の衛星都市として成長し、昭和 28 年（1953 年）には国道 171 号が開通し、商工業ともに旧三島郡を経済圏として発達してきた。昭和 30 年代に入ると内陸工業地の適地として着眼され、近代的大工場が進出し、幹線道路に接する一帯は、京阪神工業地帯の一角を形成している。昭和 38 年（1963 年）に開通した名神高速道路のインターチェンジや昭和 39 年（1964 年）に開通した大阪中央環状線などの多くの広域幹線道路が交差し、交通の要衝にある本市には、倉庫業等の流通関連企業も多く進出している。市南部の近畿自動車道、名神高速道路に近接した位置には昭和 48 年（1973 年）「北大阪流通業務地区」が整備され、地区内に大阪府中央卸売市場が開設された他、昭和 57 年（1982 年）には、国鉄貨物連絡線が営業開始している。

さらに、平成 16 年（2004 年）に本市北部の彩都西部地区がまちびらきし、住宅や公園が整備され、彩都のシンボルゾーンでは、大阪府と連携して「関西イノベーション国際戦略総合特区」等を活用し、新しい研究開発拠点であるライフサイエンスパークには、インキュベーション施設も立地し、新規産業の創出などに取り組む上で大きな資源となっており、今後も積極的な PR や相互連携を進めていく必要がある。

大阪府中央卸売市場（島・野々宮地区）

ライフサイエンスパーク（彩都）

近年では、平成 20 年（2008 年）にサッポロビール大阪工場や東芝大阪工場が閉鎖され、跡地にはそれぞれ、平成 27 年（2015 年）４月に立命館大学（大阪いばらきキャンパス）、平成 31 年（2019 年）４月に追手門学院大学が新キャンパスを開設する等、都市機能の転換が進んでいる。その他、本市内には梅花女子大学、看護・医療系の藍野大学、藍野大学短期大学部、大阪行岡医療大学の合計６つの大学が立地している。中でも追手門学院大学、立命館大学は学生数が 8,000 人以上の規模であり、追手門学院大学は経済・経営系学部のほか、平成 26 年４月に地域づくりに係る地域創造学部が設置されている。また、ＪＲ茨木駅南側の交通アクセスが良好な中心市街地において、立命館大学は経営学部、政策科学部等が開設されているほか、「地域に開かれたキャンパス」をコンセプトに校舎が建設されており、一般市民も利用可能なホール等を設置するなど、地域コミュニティの活性化に寄与している。

表 12-2 本市内の大学の概要

大学	学部	学生数（全体） 令和６年５月時点
立命館大学（大阪いばらきキャンパス）	経営学部/政策科学部/総合心理学部/グローバル教養学部/情報理工学部/映像学部	9,654人
追手門学院大学	法学部/経済学部/経営学部/地域創造学部/社会学部/心理学部/国際学部/文学部/理工学部（2025 年新設）	8,791 人
藍野大学	医療保健学部	1,227 人
藍野大学短期大学部(※)	第一看護学科/地域看護学専攻	291 人
梅花女子大学	文化表現学部/看護保健学部/心理こども学部/食文化学部	1,893 人
大阪行岡医療大学	医療学部理学療法学科	200 人

※（令和７年４月に市外へ移転）

表 12-3 都市基盤の変遷

年 月 日	事　　項
明治9年8月	国鉄茨木駅 開設
昭和3年1月	阪急茨木市駅 開設
昭和11年4月	阪急総持寺駅 開設
昭和28年11月	国道171号開通
昭和38年7月	名神高速道路茨木インターチェンジ 開設
昭和39年9月	府道大阪中央環状線 開通
昭和43年12月	北大阪流通業務地区 都市計画決定
昭和48年3月	北大阪流通業務地区 工事完了
昭和57年11月	国鉄貨物連絡線 営業開始
平成2年6月	大阪モノレール 一部営業開始
平成4年3月	阪急茨木市駅付近鉄道高架化事業 完成
平成4年5月	彩都 都市計画決定
平成16年4月	彩都西部地区まちびらき
平成23年12月	関西イノベーション国際戦略総合特区指定

表 12-4 市域の変遷

年 月 日	事　　項	市域面積(km²)
明治4年11月	廃藩置県により大阪府の管轄となる	－
明治31年10月	茨木村が町制施行	－
昭和23年1月1日	茨木町・三島村・春日村・玉櫛村が合併して市政施行	20.55
昭和29年2月10日	安威村、玉島村を合併	28.70
昭和30年4月3日	福井村・石河村・清溪村・見山村が合併	69.69
昭和30年4月15日	東能勢村との境界変更	65.96
昭和31年12月25日	豊川村東部を編入（箕面市との境界変更）	75.19
昭和32年3月30日	三宅村を合併	78.26
昭和32年4月1日	箕面市との境界変更	77.56
昭和32年7月1日	三島町との境界変更	77.26
昭和33年1月1日	吹田市との境界変更	77.82
昭和34年4月1日	高槻市との境界変更	77.82
昭和35年4月1日	三島町との境界変更	75.16
昭和48年4月1日	摂津市との境界変更	75.15
昭和52年12月1日	吹田市との境界変更	75.15
昭和55年12月1日	摂津市との境界変更	75.15
昭和63年10月1日	国土地理院による面積値改定	76.56
平成4年10月1日	国土地理院による面積値改定	76.51
平成8年10月1日	国土地理院による面積値改定	76.52
平成11年2月1日	箕面市との境界変更	76.52
平成27年3月6日	国土地理院による面積値改定	76.49

②中心市街地の沿革

中心市街地においては、室町時代に茨木氏によって茨木城が築かれ、城下町が形成された。その後、江戸時代初期の一国一城令による廃城後は、地域商業の中心地であるとともに、酒造業や人力搾油業等の産業を中心に、在郷町として繁栄した。明治９年（1876 年）には、官設鉄道（現在のＪＲ東海道本線）が敷設され、昭和初期には新京阪鉄道（現在の阪急京都線）が敷設され、交通の要衝として発展していった。この頃の「大日本職業別明細図」を見ると、現在のＪＲ茨木駅前には商店がほとんど見られず、材木店や運送業者が立地していたことが分かる。一方、現在の阪急茨木市駅から当時の茨木町役場にかけては、多数の商店や銀行、郵便局などの金融機関が立地していた。さらに両駅間の市街地には工場もいくつか含まれており、商工混在の用途利用となっていた。現在の阪急茨木市駅東側はほとんど開発が行われていなかったことも分かる。この昭和初期に両駅間の地区が中心市街地として形成された。

高度経済成長期以降、中心市街地は神社、仏閣、町家など歴史的な資産も残しつつ、個店が集まった商店街や駅前の商業ビルの建設等により、商業集積地として更に発展していった。それに加え、マンションをはじめとする宅地開発が急速に進み、商業地及び宅地が併存する市街地が形成されていった。

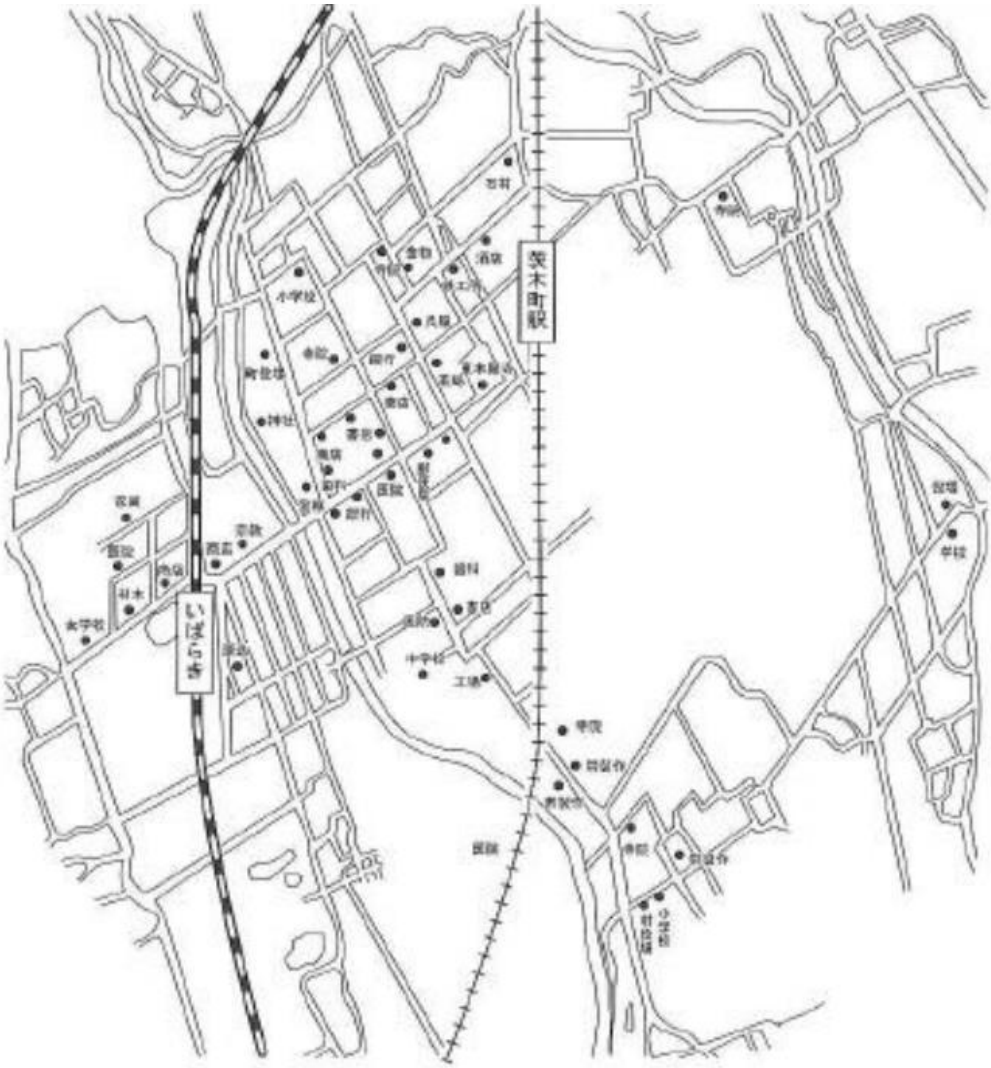


図 12-2　昭和初期の茨木町市街地

（出典：「大日本職業別明細図」第 246 号より作成）

（３）中心市街地の概況

本市の中核であるＪＲ茨木駅及び阪急茨木市駅を含む地域には、商業・文化・行政関連の施設が集積している。

特に、阪急茨木市駅西側から元茨木川緑地にかけての地域は、古くから在郷町として栄えた本市の中心地であり、複数の商店街が形成されているほか、旧茨木城の櫓門が復元されている茨木小学校や茨木神社、茨木別院等の歴史的・文化的資源をはじめ、男女共生センターローズ WAM や障害福祉センターハートフル等の公共施設等が立地している。

阪急茨木市駅周辺及びその東側地域にも、近年に建設された商業ビル、店舗等が多く立地している。

元茨木川緑地からＪＲ茨木駅周辺にかけても、市役所や市民総合センター等の公共施設をはじめ複数の商店街が形成されており、平成 27 年度には、立命館大学大阪いばらきキャンパスがＪＲ茨木駅南側に開学した。当初、約 6,000 人の学生数から平成 28 年４月には総合心理学部が、平成 31 年４月にはグローバル教養学部が、令和６年４月には映像学部・情報理工学部が開設され、現在約 10,000 人規模に拡大された。

また、令和５年度には、中央公園が位置していた場所に、第１期計画の主要事業であるおにクルが 11 月 26 日に開館し、開館日に想定を大きく上回る 15,000 人の来館、開館から約半年で累計来館者数が 100 万人を超える等、高い集客効果を誇っている。おにクルが開館したことから、市民会館跡地や福祉文化会館は閉館し、その跡地は都市公園としての再整備を予定している。

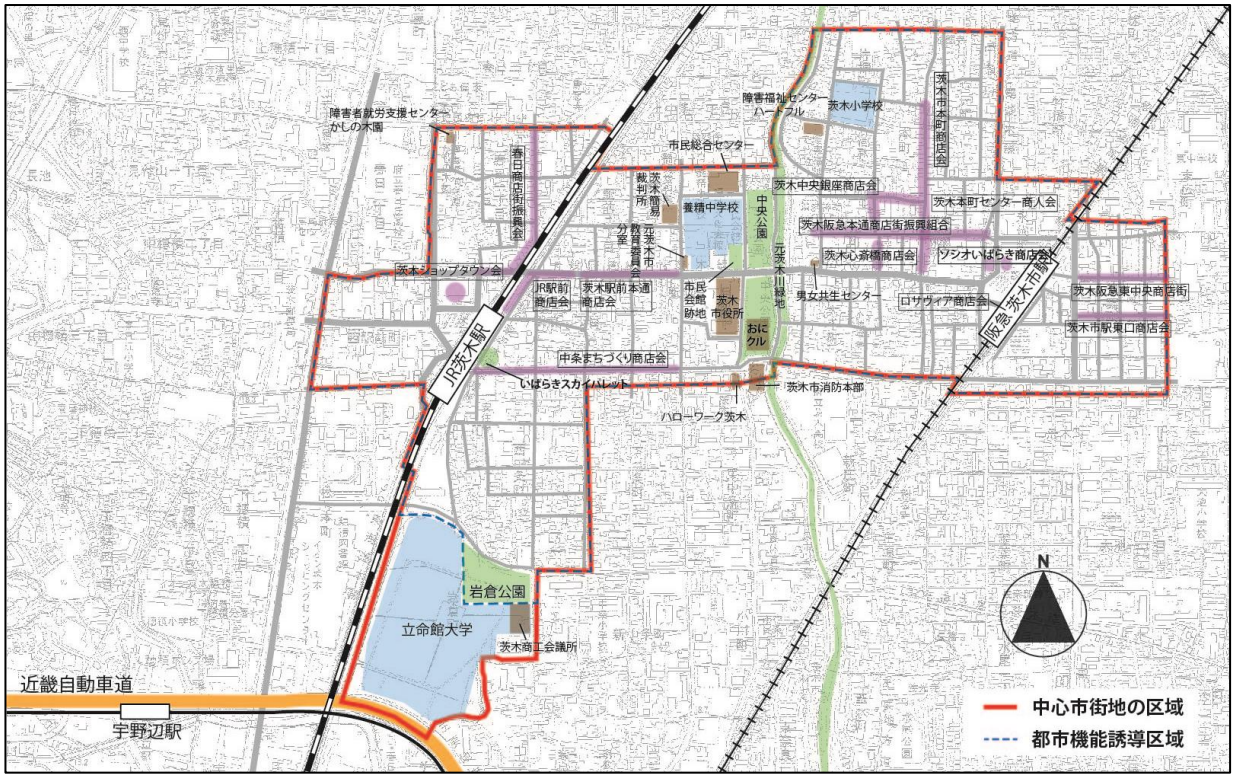


図 12-3 中心市街地の概況（再掲）

（４）茨木市における中心市街地の歴史的・文化的役割

中心市街地においては、かつての茨木城跡地（現在の茨木小学校）で旧茨木城の櫓門が復元されている他、元町や大手町を中心に残存する町家をはじめ、807 年に創建された茨木神社や本源禅寺、茨木別院等、神社仏閣も多く残存している。中心市街地を南北に流れていた茨木川は、現在は全長約５㎞、1500 本の桜をはじめ多数の樹木が植えられた「元茨木川緑地」として整備され、大阪みどりの百選に選出されている。毎年春には「茨木市民さくらまつり」が開催されるなど、市民の憩いの場となっている。

ＪＲ茨木駅及び阪急茨木市駅の中間に位置するおにクルや中央公園、IBALAB@広場等を含めた周辺には、上記の元茨木川緑地など複数のオープンスペースが立地しており、２日間で延べ約 20 万人を集客する茨木フェスティバルをはじめ様々なイベントが年間を通じて開催されており、多くの来訪者があり、市民の賑わいの場となっている。

また、サークルや団体でのスポーツや大会、文化的活動など市民活動の場としても利用されており、日常においては市民の憩いの場となっている。ＪＲ茨木駅東口の「いばらきスカイパレット」では、まちづくり会社「ＦＩＣベース株式会社」が手掛けるカフェもオープンする等、市民の憩いの場の形成が進められている。

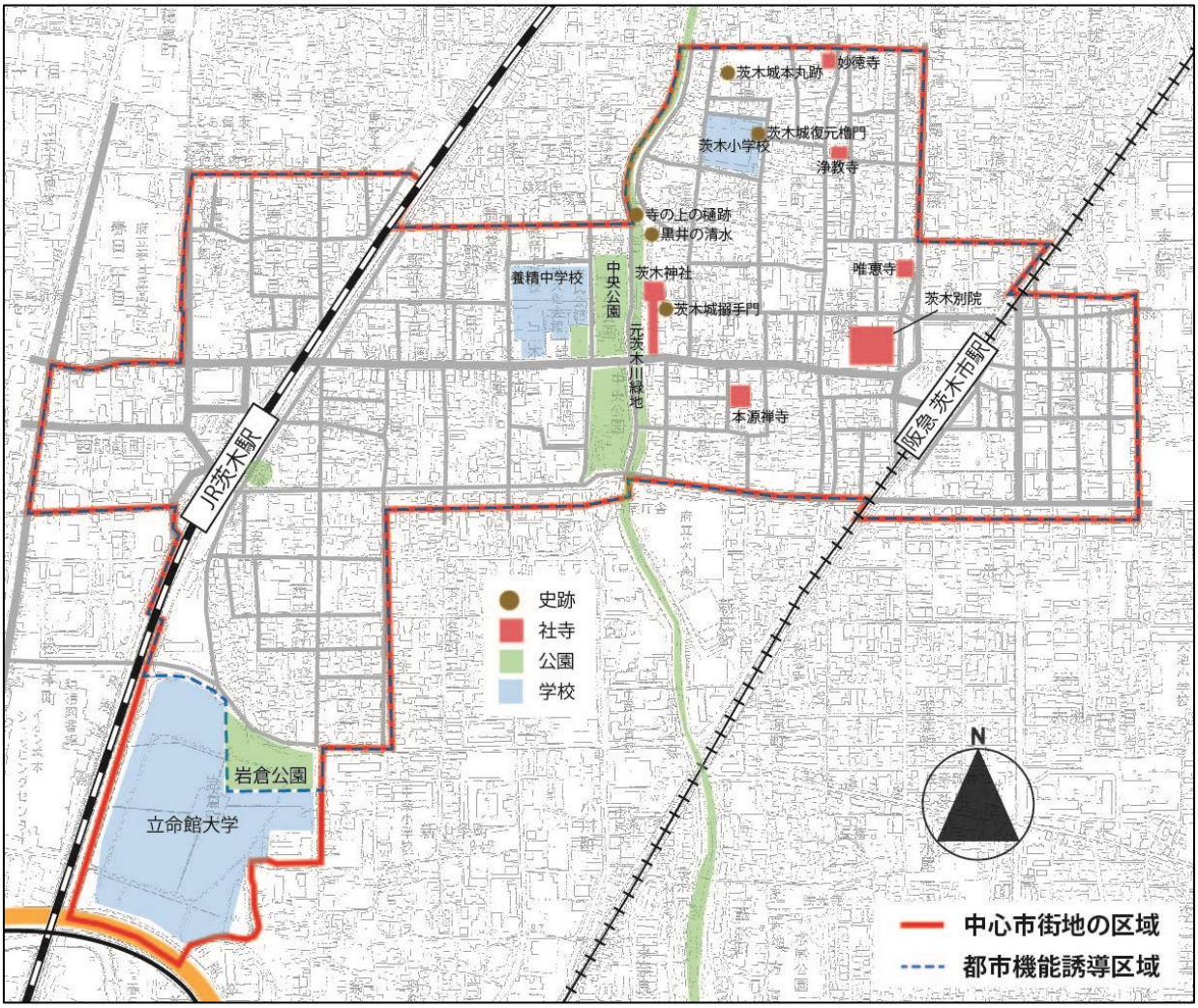


図 12-4 史跡・社寺・公園の位置

元茨木川緑地

茨木神社

中央公園

IBALAB＠広場

いばらきスカイパレット

文化・子育て複合施設おにクル

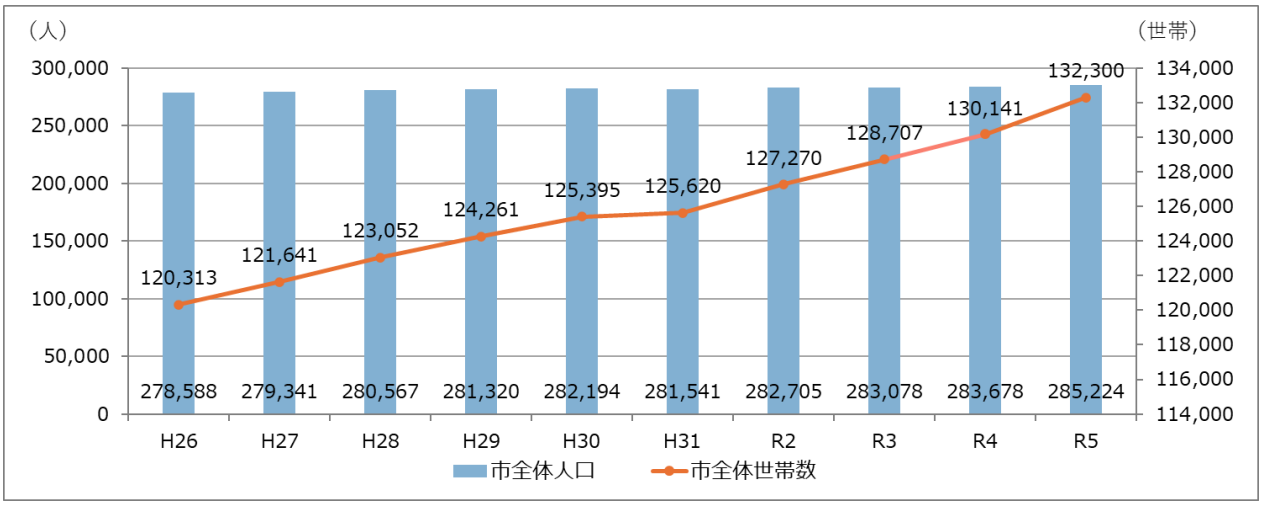
表 12-5 中心市街地で開催されている主なイベント

開催時期	イベント名称	開催場所	主催者
１月９-11 日	茨木十日戎	茨木神社	茨木神社
３月下旬-４月上旬	茨木市民さくらまつり	元茨木川緑地	茨木市
４月下旬	みんな集まれ！！ボランティア in いばらき	中央公園	ボランティアの集い実行委員会
５月上旬	茨木音楽祭	中央公園	茨木音楽祭実行委員会
５月中旬	キッズスポーツフェスタ	中央公園	茨木市・茨木市体育協会
５月中旬	いばらき×立命館 DAY	立命館大学大阪いばらきキャンパス、岩倉公園	立命館大学・茨木市
6 月 30 日	大祓　茅の輪くぐり神事	茨木神社	茨木神社
７月下旬	茨木フェスティバル	中央公園	茨木フェスティバル協会
10 月～11 月	黒井の清水大茶会	茨木神社	茨木市観光協会
10 月上旬	茨木麦音フェスト	中央公園	茨木麦音フェスト実行委員会
10 月上旬	IBARAKI DANCE STREET	中央公園	IBARAKI DANCE STREET 実行委員会
10 月中旬	Ａｓｉａ　Ｗｅｅｋ	立命館大学大阪いばらきキャンパス	立命館大学
10 月	BOOK　TRAVEL	元茨木川緑地、おにクルほか	茨木市
10 月～11 月	IBARAKI JAZZ ＆ CLASSIC FESTIVAL	阪急茨木市駅前ほか	IBARAKI JAZZ CLASSIC FESTIVAL 実行委員会
11 月上旬	茨木蚤の市	元茨木川緑地ほか	ＦＩＣベース株式会社
11 月上旬	いばらきバル	主に中心市街地内の飲食店等	いばらきバルフェスタ協会
11 月中旬	茨木市農業祭	中央公園	茨木市農業祭実行委員会
11 月中旬	いばらき環境フェア	R4・5 クリエイトセンター、IBALAB@広場 R6～おにクル、中央公園	茨木市
11 月下旬	茨木ヴィンテージカーショー	中央公園	茨木ヴィンテージカーショー実行委員会
12 月～１月	いばらきイルミフェスタ灯（イルミネーション）	ＪＲ茨木駅前ほか	いばらきイルミフェスタ実行委員会
１月～２月	いばらきロカボア	市内一円（飲食店）	いばらきイルミフェスタ実行委員会
毎月第２土曜	えきまえマルシェ	いばらきスカイパレット	ＦＩＣベース株式会社
年２～３回	ガンバるフェスタ	茨木神社、おにクルほか	茨木商工会議所

［２］地域の現状に関する統計的なデータの把握・分析

（1） 中心市街地の現状分析

①人口及び世帯数

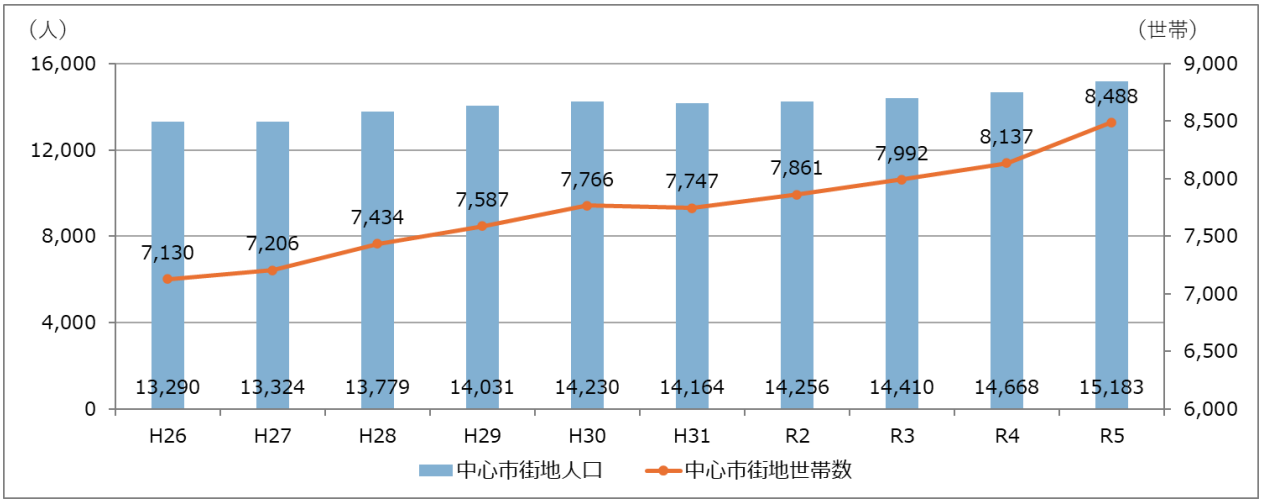


（資料：住民基本台帳、各年３月）

図 12-5 市全体の人口及び世帯数

平成 26 年度から令和５年度までの 10 年間の本市の人口及び世帯数の推移は、人口 6,636 人、世帯数 11,987 世帯の増加となっている。平成 26 年度から令和５年度の 10 年間における、１世帯あたりの人口は 2.32 人から 2.16 人へと推移しており、単身又は小世帯化が進行している。

また、同期間における本市の中心市街地の人口及び世帯数の推移をみると、人口 1,893 人、世帯数 1,358 世帯の増加となっている。



（資料：住民基本台帳、各年３月）

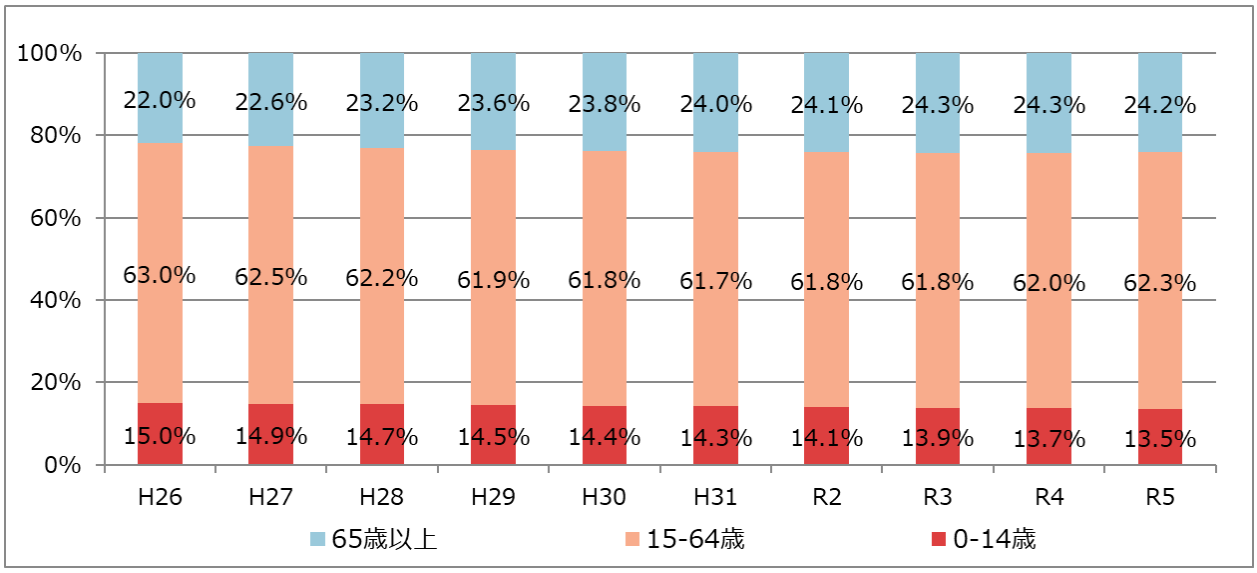
図 12-6 中心市街地の人口及び世帯数

中心市街地区域 16 町丁目
（春日一丁目、西駅前町、駅前一～四丁目、西中条町、岩倉町、
片桐町、元町、大手町、本町、宮元町、別院町、永代町、双葉町）

②年齢別人口

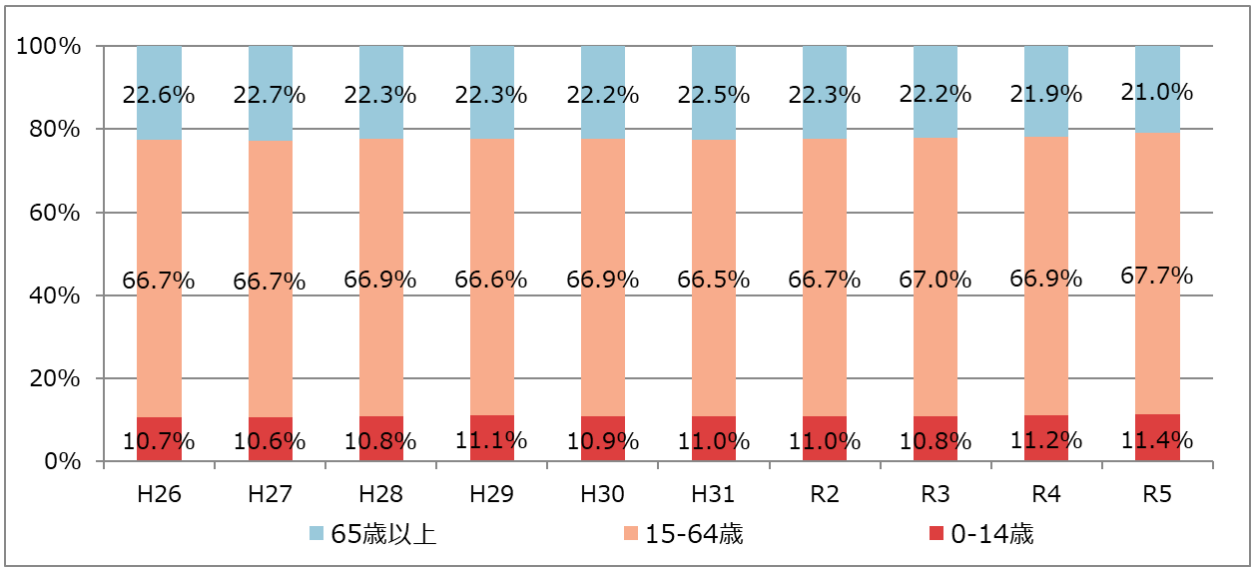
平成 26 年度から令和５年度までの 10 年間の本市全体の年齢別人口の推移では、65 歳以上人口については、22.0%から 24.2%と２ポイント以上の増加となっている。15～64 歳人口については、63.0%から 62.3%と、約１ポイント減少している。また、0～14 歳人口については 15.0%から 13.5%と、約２ポイントの減少となっている。

同じく中心市街地での推移をみると、65 歳以上人口については、22.6%から 21.0%と約２ポイントの減少、15～64 歳人口については、66.7%から 67.7%へと１ポイント増加、0～14 歳人口については 10.7%から 11.4%と 0.7 ポイント増加と、市全体推移の傾向と逆となっている。



（資料：住民基本台帳、各年３月）

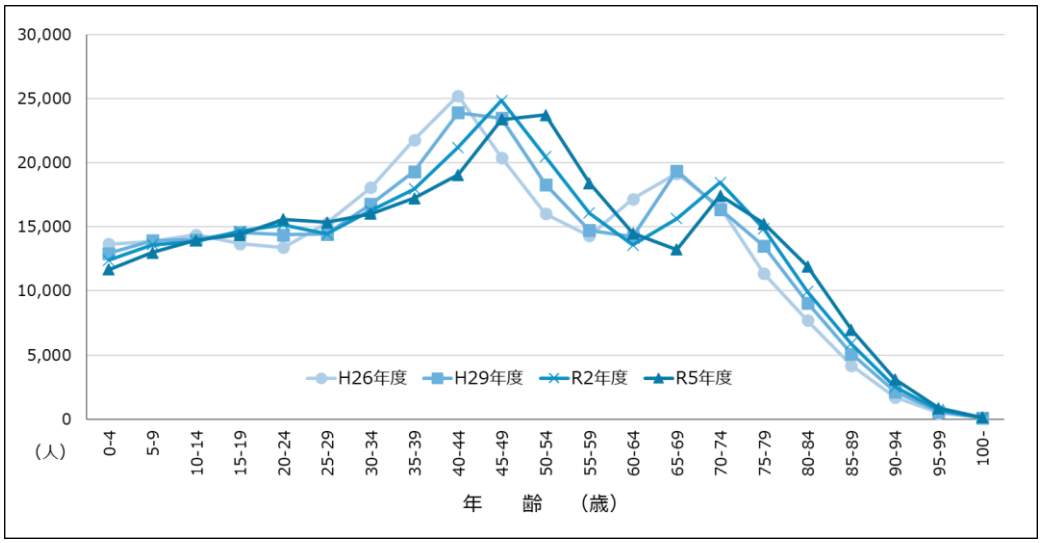
図 12-7　全市の年齢別人口



（資料：住民基本台帳、各年３月）

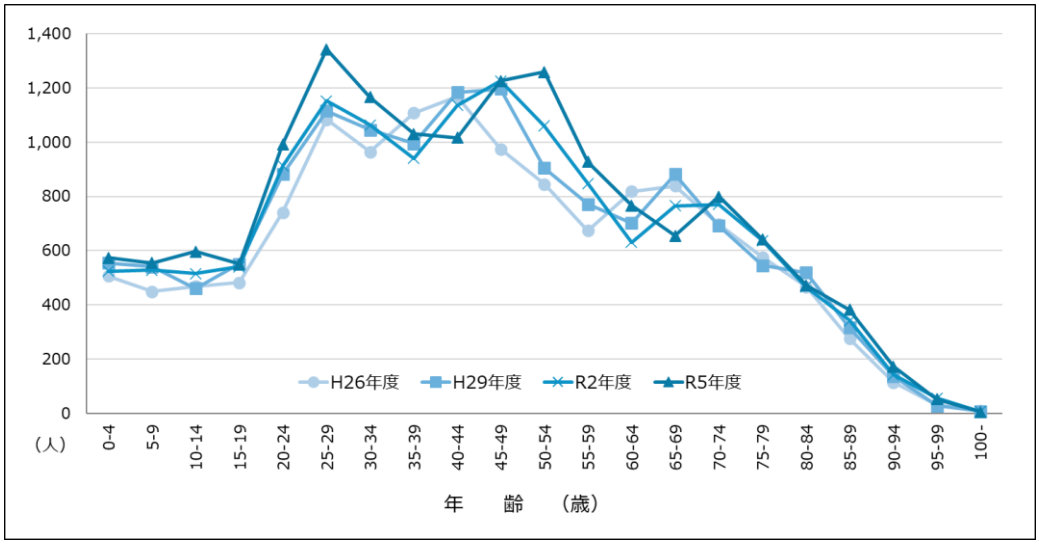
図 12-8　中心市街地の年齢別人口

令和５年度における５歳階級別の年齢別人口は、市全体では 50～54 歳、中心市街地では 25～29 歳が最も多い。



（資料：住民基本台帳、各年３月）

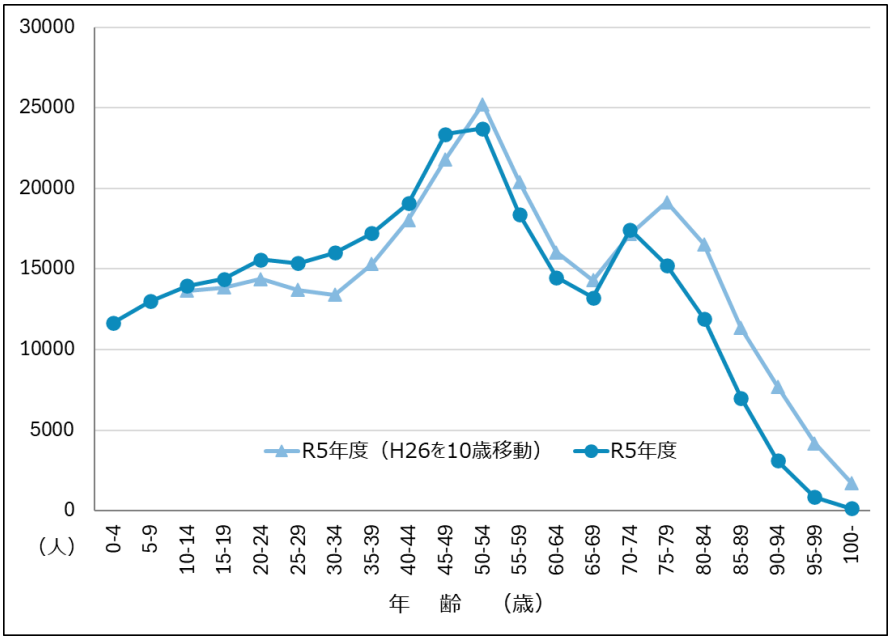
図 12-9　全市の年齢別人口



（資料：住民基本台帳、各年３月）

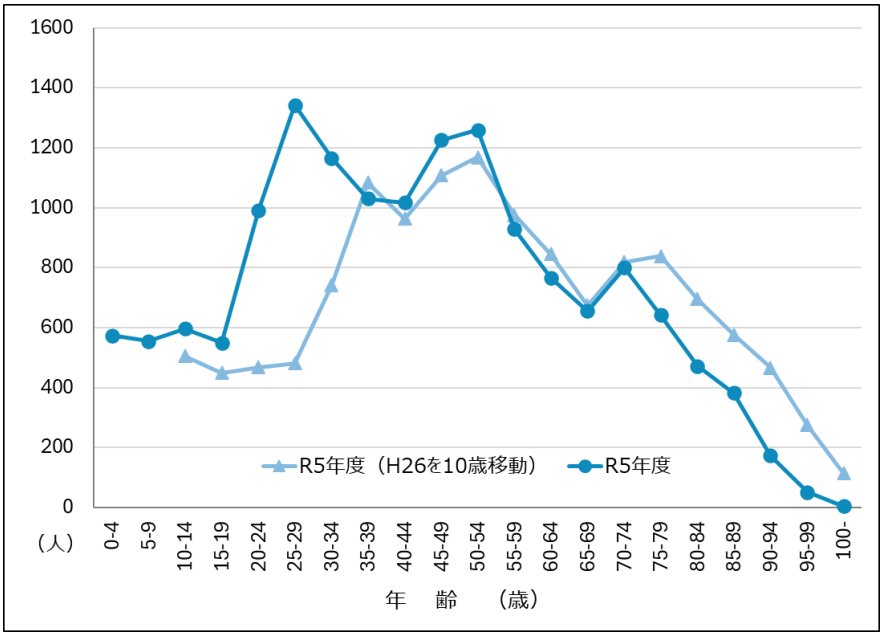
図 12-10　中心市街地の年齢別人口

平成 25 年度における年齢別人口を 10 年移動させた数値と、令和５年度における年齢別人口とを比較すると、市全体では人口移動（転入転出）に大きな変化は見られないが、中心市街地では 20～39 歳の人口流入が多く、若い世代の人口が増加していることがうかがえる。



（資料：住民基本台帳、各年３月）

図 12-11　年齢別人口の 10 年間推移（全市）（再掲）



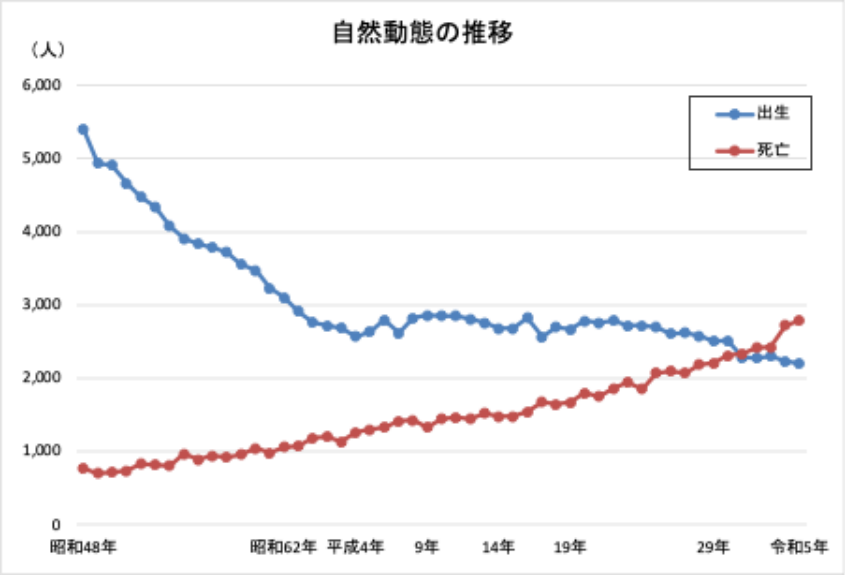
（資料：住民基本台帳、各年３月）

図 12-12　年齢別人口の 10 年間推移（中心市街地）（再掲）

③人口動態

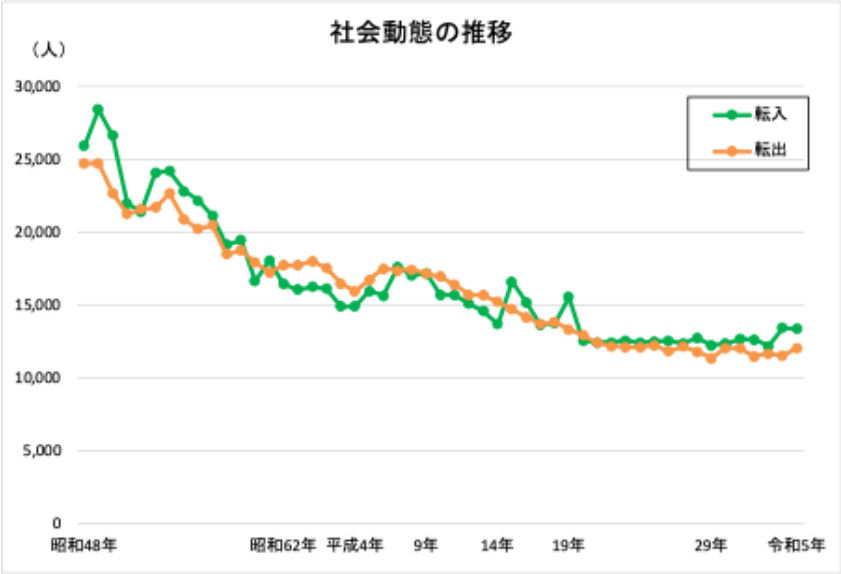
本市全体の自然動態をみると、令和４年の出生は 2,230 人、死亡は 2,727 人で、死亡が出生を 497 人上回り、令和元年以降は自然減となっている。自然動態の推移をみると、出生は、昭和 48 年の 5,399 人をピークに減少し続け、平成に入って以降ほぼ横ばいであったが、令和元年に大きく減少し、そのままほぼ横ばいとなった。

また、本市全体の社会動態をみると、令和５年の転入は 13,371 人、転出は 12,067 人で転入が転出を上回り、1,304 人の社会増であった。社会動態の推移をみると、昭和 59 年までは、概ね転入が転出を上回り、社会増となっていたが、昭和 60 年以降は、概ね転出が転入を上回り、社会減が続いた。しかし、増減を繰り返しながらも、彩都の開発やマンションの建設等により、平成 21 年以降は社会増の傾向にある。



（資料：茨木市統計書 令和５年版）

図 12-13 全市 自然動態の推移



（資料：茨木市統計書 令和５年版）

図 12-14 全市 社会動態の推移

（３）全市の産業構造

①生産額からみた産業構造

RESAS を活用し、本市の生産額（総額）から産業の構成割合をみると、３次産業が 67.9%と全国よりも高い割合となっている。

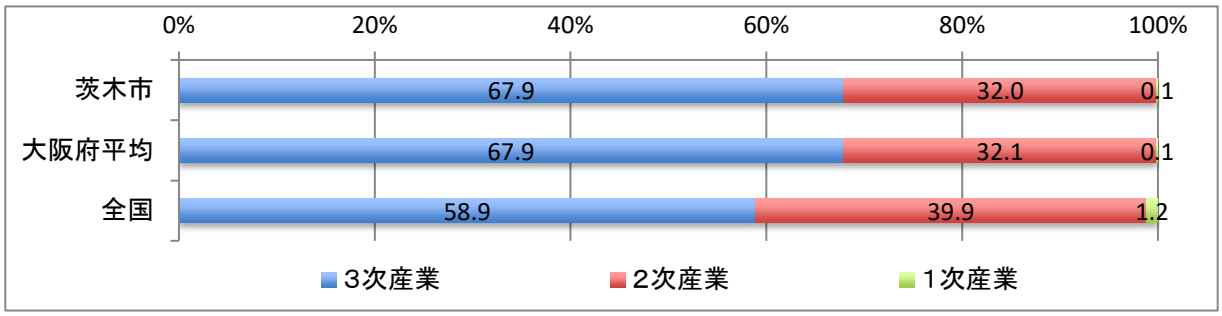


図 12-15 地域内産業の構成割合（生産額（総額））2018

また、本市における３次産業の内訳を見ると、「住宅賃貸業」、「運輸・郵便業」、「教育」が全国、大阪府より高くなっている。

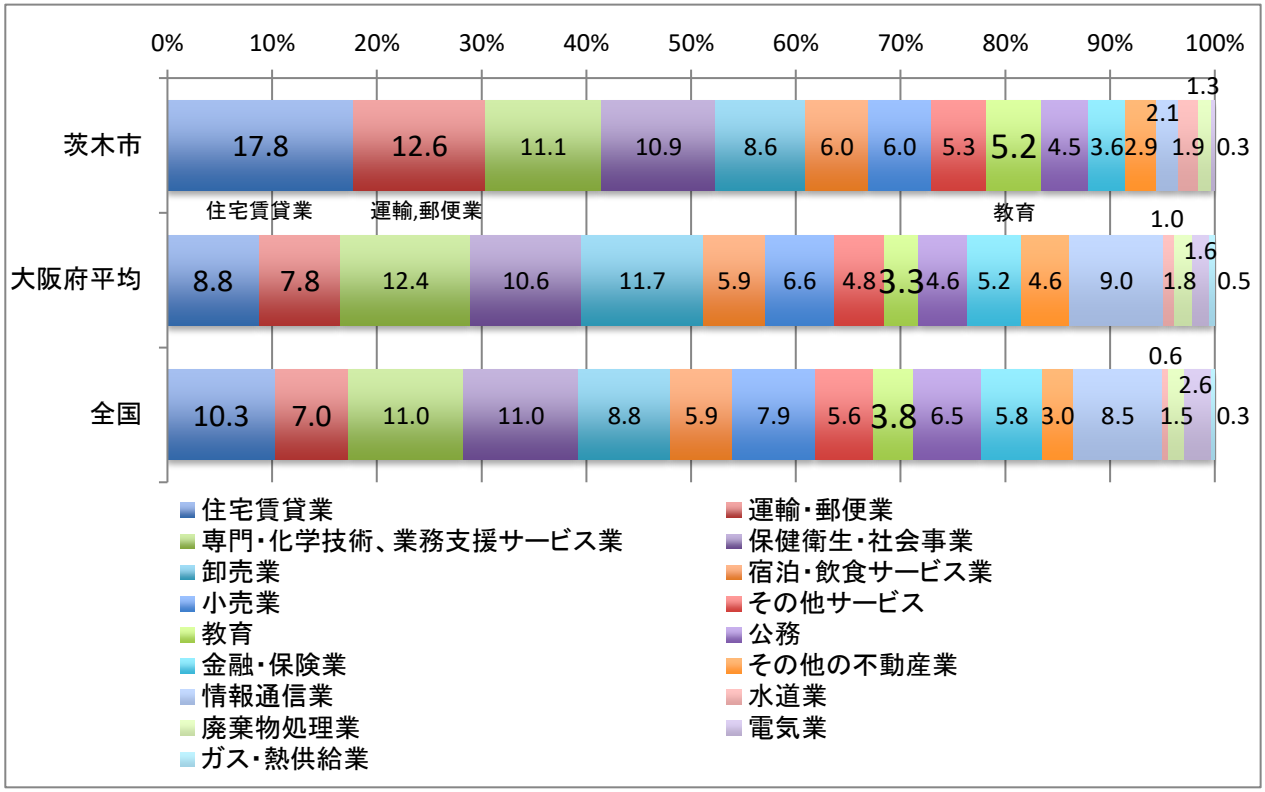


図 12-16 地域内産業の構成割合 3次産業（生産額（総額））2018

②事業所数・売上高・付加価値額からみた産業構造

RESAS を活用し、事業所数から本市の産業構造をみると、「運輸業，郵便業」、「不動産業，物品賃貸業」、「教育，学習支援業」、「医療、福祉」が大阪府、全国よりも高い構成比となっている。

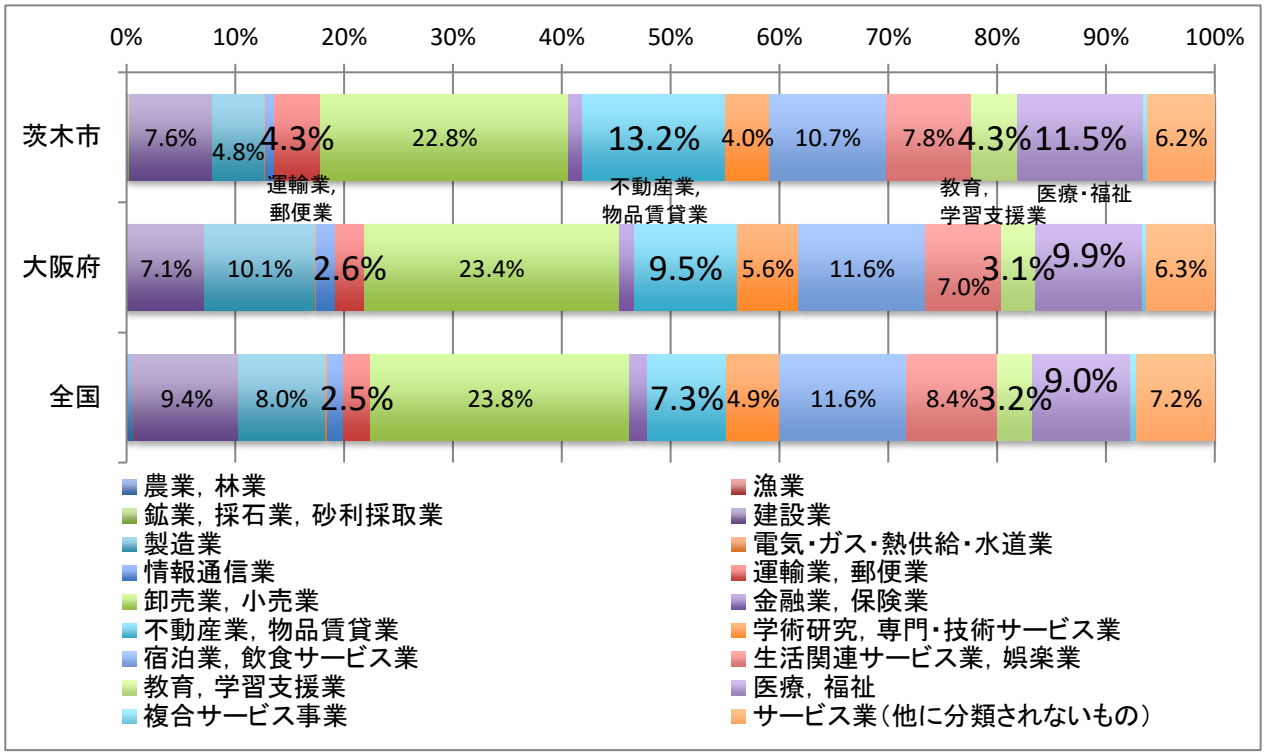


図 12-17　事業所数（事業所単位）2021

また、売上高から本市の産業構造をみると、「製造業」、「卸売業，小売業」が全体に占める割合が高く、大阪府、全国よりも高い構成比となっている。

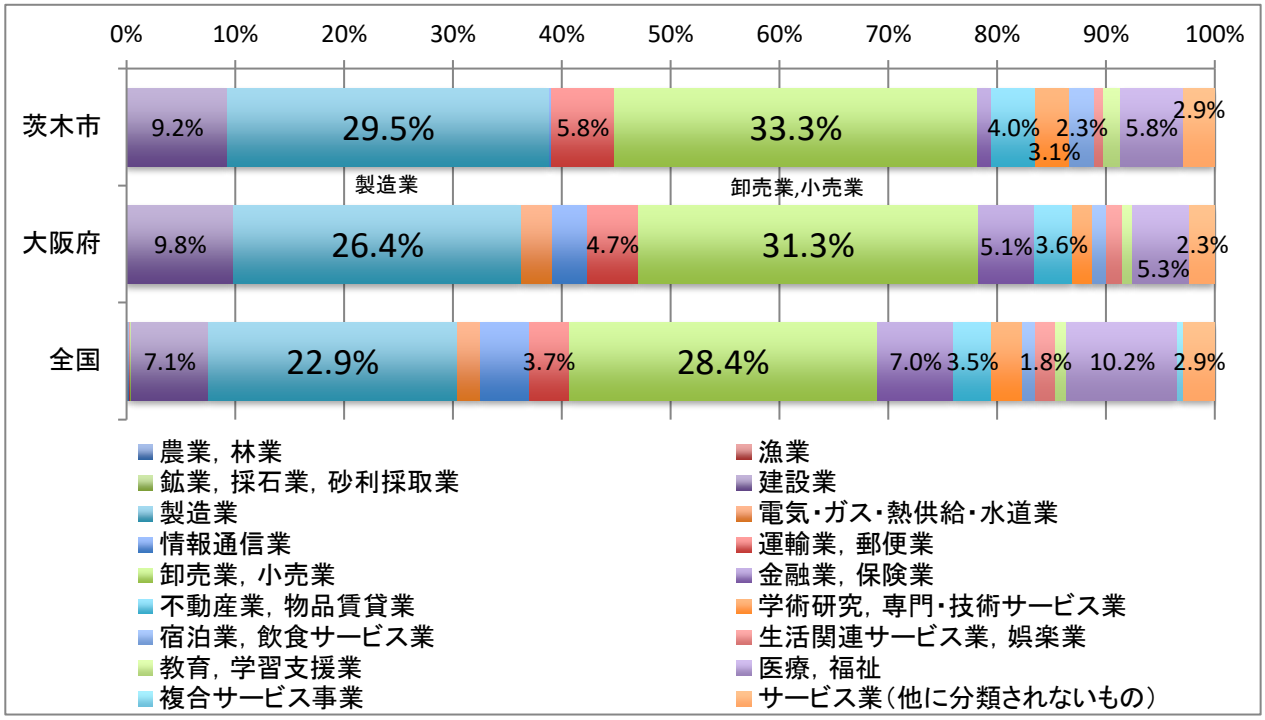


図 12-18　売上高（企業単位）2021

付加価値額から本市の産業構造をみると、「製造業」が全体に占める割合も高く、大阪府、全国よりも高い構成比となっている。また、「運輸業、郵便業」、「卸売業、小売業」、「不動産業、物品賃貸業」で大阪府、全国よりも高い構成比となっている。

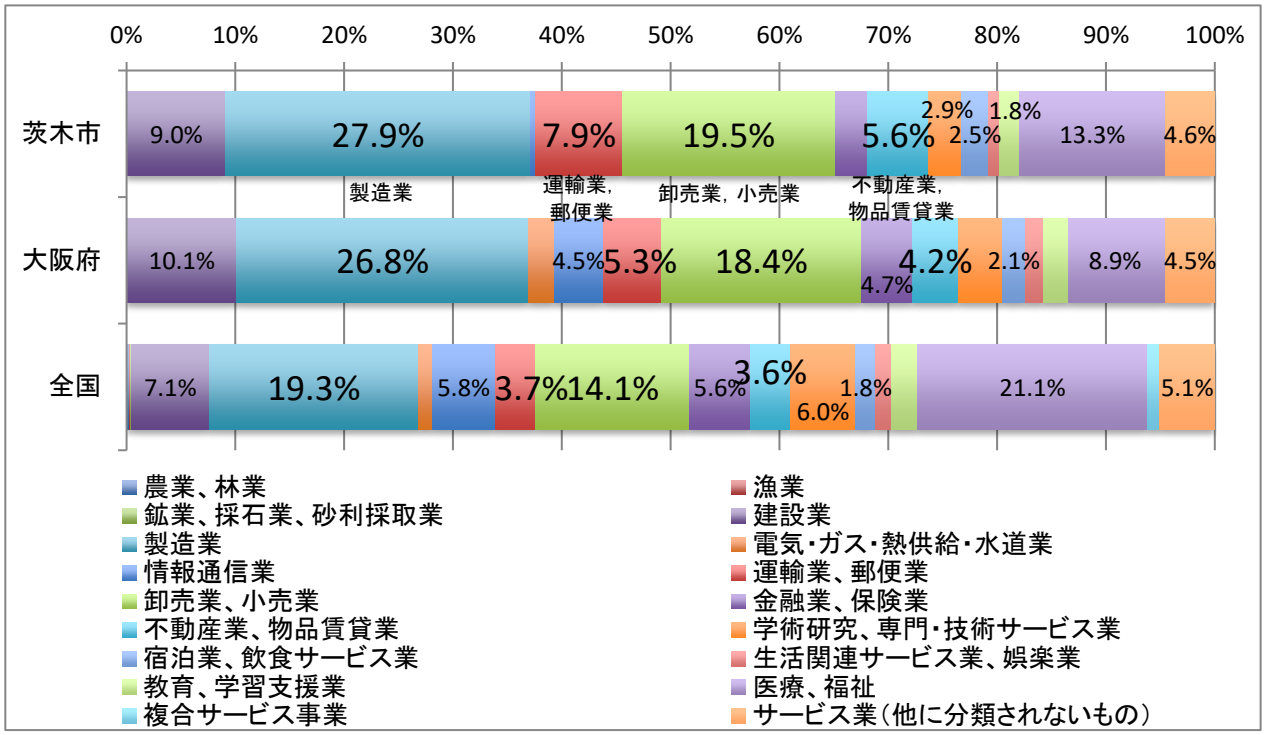


図 12-19　付加価値額（企業単位）2021

（４）商業に関する現状分析

①市全体及び中心市街地の小売業事業所数・従業員数・年間商品販売額・販売面積推移

商業統計及び経済センサスより、市全体及び中心市街地の小売業の動向をみると、市全体では、事業所数が平成 26 年から平成 28 年にかけて増加したものの、平成 28 年から令和３年にかけては減少し、1,120 事業所となっており、年間商品販売額も同様の推移となっている。従業員数と販売面積については、平成 26 年から令和３年にかけて増加を続けている。

中心市街地では、平成 26 年から平成 28 年にかけて事業所数は増加したものの、平成 28 年から令和３年にかけては減少し 244 事業所にまで落ち込み、年間商品販売額も同様の推移となっている。従業員数は平成 26 年から令和３年にかけて増加を続けているが、販売面積は平成 26 年から令和３年にかけて減少を続けている。

また、事業所数、従業員数、年間商品販売額、販売面積全てにおいて、対市シェア率は減少を続けている。

表 12-6　小売業事業所数･従業員数･年間商品販売額･販売面積の推移

		H26	H28	R3
小売業事業所数（事業所）	市全体	1,067	1,200	1,120
	中心市街地	258	280	244
	対市シェア率	24.18%	23.33%	21.79%
小売業従業員数（人）	市全体	10,782	12,440	12,711
	中心市街地	1,950	2,124	2,154
	対市シェア率	18.09%	17.07%	16.95%
小売業年間商品販売額（百万円）	市全体	212,938	246,013	233,696
	中心市街地	28,430	31,305	26,668
	対市シェア率	13.35%	12.72%	11.41%
小売業販売面積（㎡）	市全体	180,008	190,585	199,844
	中心市街地	29,041	27,799	22,564
	対市シェア率	16.13%	14.59%	11.30%

（資料：商業統計調査（H26）、経済センサス（H28・R3））

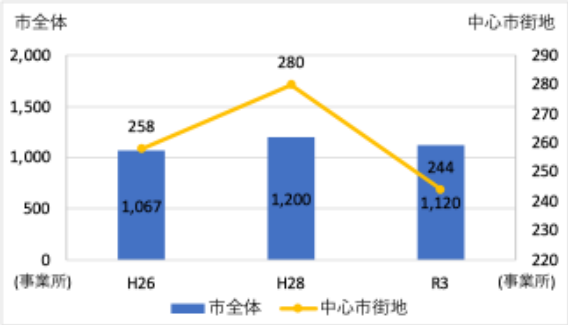


図 12-20　小売業事業所数

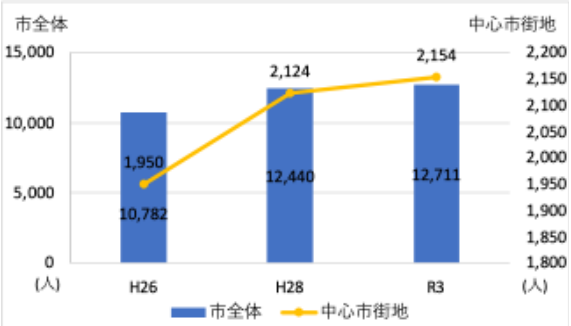


図 12-21　小売業従業員数

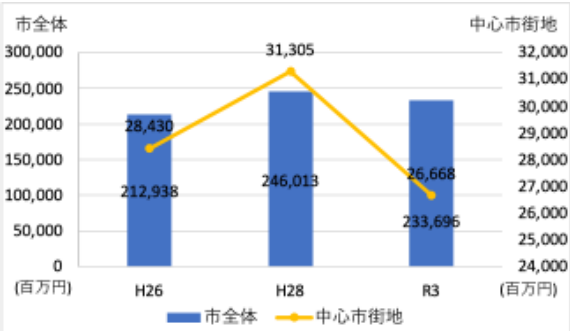


図 12-22　小売業年間商品販売額

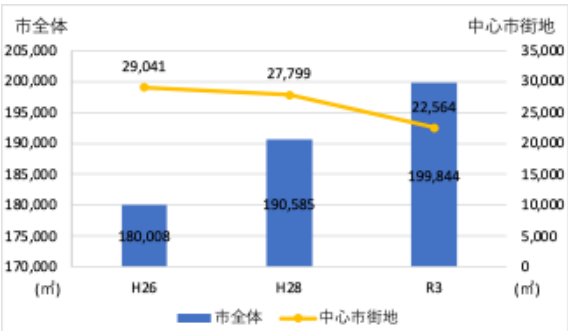


図 12-23　小売業販売面積

②中心市街地のエリア別小売業事業所数・従業員数・年間商品販売額・販売面積推移

商業統計及び経済センサスより、中心市街地のエリア別に小売業の動向をみると、令和３年で事業所数が最も多く商業集積が進んでいるのは「阪急茨木市駅西エリア」となっている。

事業所数の推移をみると、「阪急茨木市駅西エリア」と「ＪＲ茨木駅西エリア」では平成 26 年から平成 28 年にかけて増加したものの、平成 28 年から令和３年にかけては減少している。「ＪＲ茨木駅東エリア」、「阪急茨木市駅東エリア」については概ね横ばいで推移している。

従業員数は「ＪＲ茨木駅西エリア」と「阪急茨木市駅西エリア」で平成 26 年から平成 28 年にかけて増加したものの、平成 28 年から令和３年にかけて減少している。一方、「ＪＲ茨木駅東エリア」と「阪急茨木市駅東エリア」では平成 26 年から平成 28 年にかけて減少したが、平成 28 年から令和３年にかけては増加している。

年間商品販売額については、「ＪＲ茨木駅東エリア」のみ平成 26 年から令和３年にかけて増加を続けており、それ以外のエリアでは平成 26 年から平成 28 年にかけて増加したものの平成 28 年から令和３年にかけて減少している。また、販売面積は全てのエリアで平成 28 年から令和３年にかけて減少している。

表 12-7　エリア別小売業事業所数・従業員数・年間商品販売額・販売面積の推移

		H26	H28	R3
小売業事業所数 （事業所）	阪急茨木市駅西エリア	163	174	147
	阪急茨木市駅東エリア	24	25	26
	JR茨木駅東エリア	32	31	30
	JR茨木駅西エリア	39	50	41
小売業従業員数 （人）	阪急茨木市駅西エリア	942	1,169	940
	阪急茨木市駅東エリア	253	232	292
	JR茨木駅東エリア	360	199	535
	JR茨木駅西エリア	395	524	387
小売業年間商品販売額 （百万円）	阪急茨木市駅西エリア	10,211	12,363	10,337
	阪急茨木市駅東エリア	5,854	6,142	5,153
	JR茨木駅東エリア	5,707	6,039	6,269
	JR茨木駅西エリア	6,657	6,761	4,909
小売業販売面積 （㎡）	阪急茨木市駅西エリア	13,487	10,658	10,029
	阪急茨木市駅東エリア	5,841	6,733	3,652
	JR茨木駅東エリア	4,464	5,894	4,755
	JR茨木駅西エリア	5,249	4,514	4,128

（資料：商業統計調査（H26）、経済センサス（H28・R3））

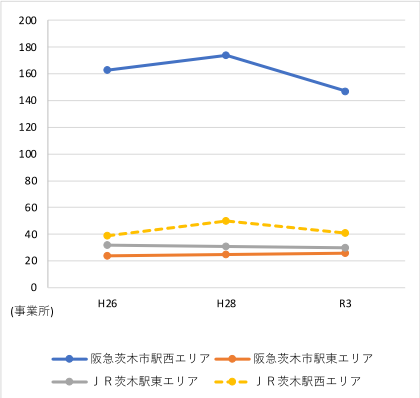


図 12-24　小売業事業所数（エリア別）

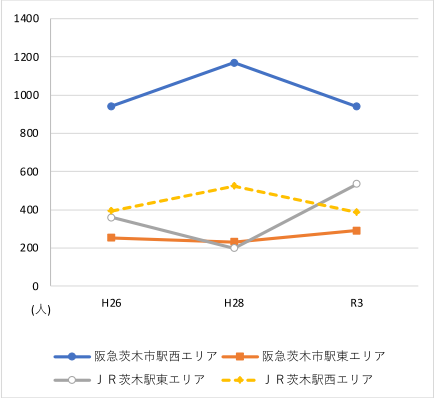


図 12-25　小売業従業員数（エリア別）

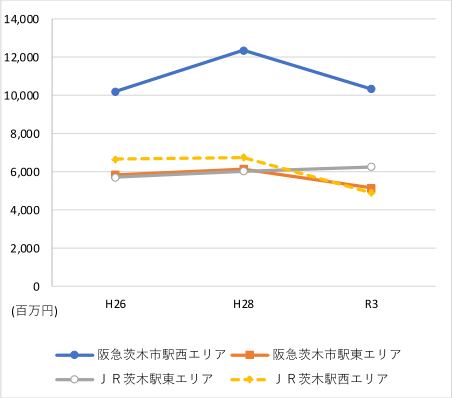


図 12-26　小売業年間商品販売額（エリア別）

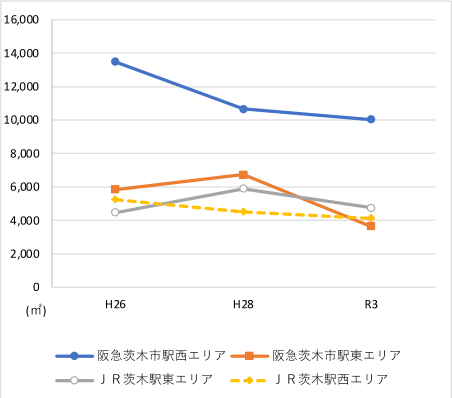


図 12-27　小売業販売面積（エリア別）

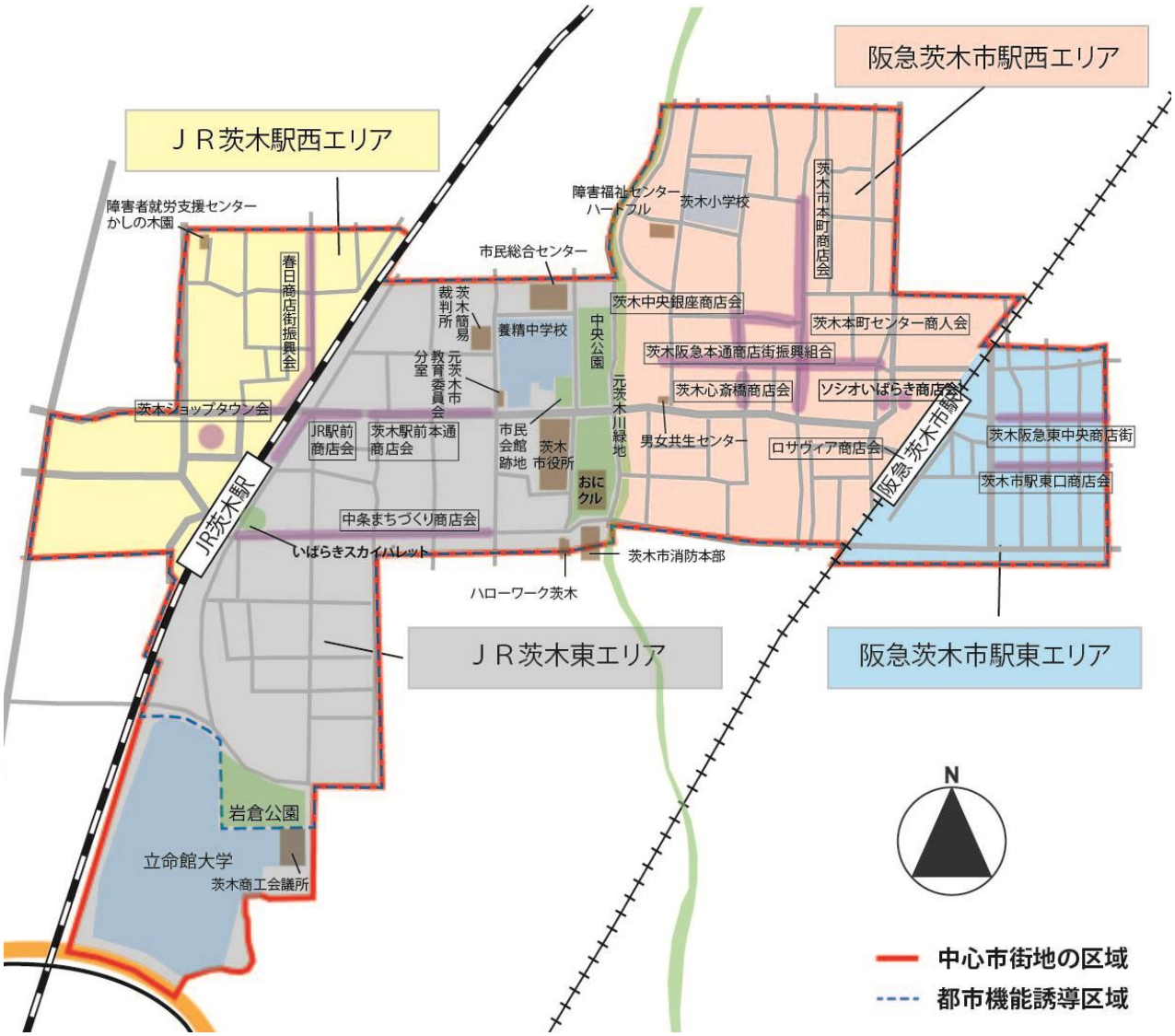


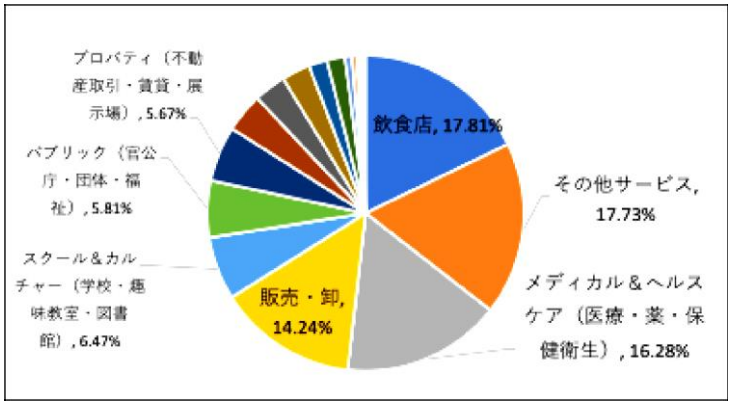
図 12-28　中心市街地内エリア図

③　中心市街地における業種別事業所数の推移

RESAS を活用し、図 12-29 の範囲を中心市街地として設定し、エリア内の事業所数の業種別分析を行ったところ、産業構造は、「飲食店」、「その他サービス」「メディカル&ヘルスケア」「販売・卸」が多くなっている。また、2011 年から 2023 年にかけての事業所数の推移を見ると、全体的に減少している。

＊事業所数のデータは、日本ソフト販売株式会社「電話帳データ」、国際航業株式会社「住所正規化コンバータ R7」に基づく。
＊業種分類については日本ソフト販売株式会社による独自調査に基づく。各年データは、7 月時点の電話帳掲載情報から作成されているが、電話帳の更新タイミングの変更等により年次間で掲載情報に変化が生じないケースがある。

図 12-29　RESAS で設定した茨木市中心市街地の範囲



飲食店	245	17.81%
その他サービス	244	17.73%
メディカル&ヘルスケア（医療・薬・保健衛生）	224	16.28%
販売・卸	196	14.24%
スクール&カルチャー（学校・趣味教室・図書館）	89	6.47%
パブリック（官公庁・団体・福祉）	80	5.81%
プロパティ（不動産取引・賃貸・展示場）	78	5.67%
二次産業（製造・加工）	55	4.00%
建設・工事	45	3.27%
マネー&ファイナンス（金融・保険・証券）	40	2.91%
スポーツ&レジャー（スポーツ・趣味娯楽・レジャー）	26	1.89%
ドライブ（自動車・オートバイ・自転車・ドライブ）	25	1.82%
トランスポーテーション（交通・運輸・倉庫）	10	0.73%
出版・印刷	7	0.51%
ライフライン（電気・ガス・通信・放送・新聞）	5	0.36%
トラベル（旅行・観光・温泉・旅館・ホテル）	4	0.29%
一次産業（農林・水産・鉱業）	3	0.22%
計	1,376	100.00%

図 12-30　茨木市中心市街地の産業構造（2023 年）

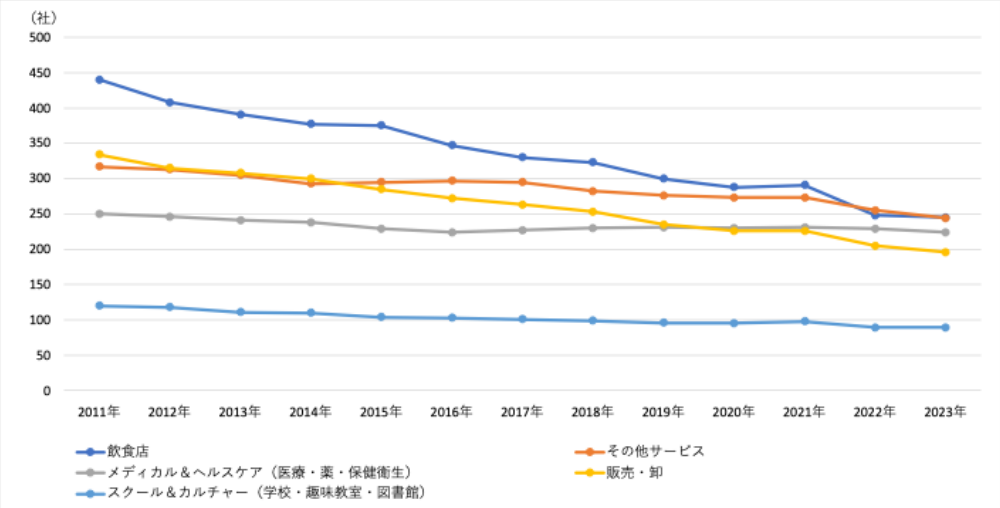


図 12-31　茨木市中心市街地の業種別事業所数推移（2011～2023 年）

⑤ 中心市街地における新規出店の動向

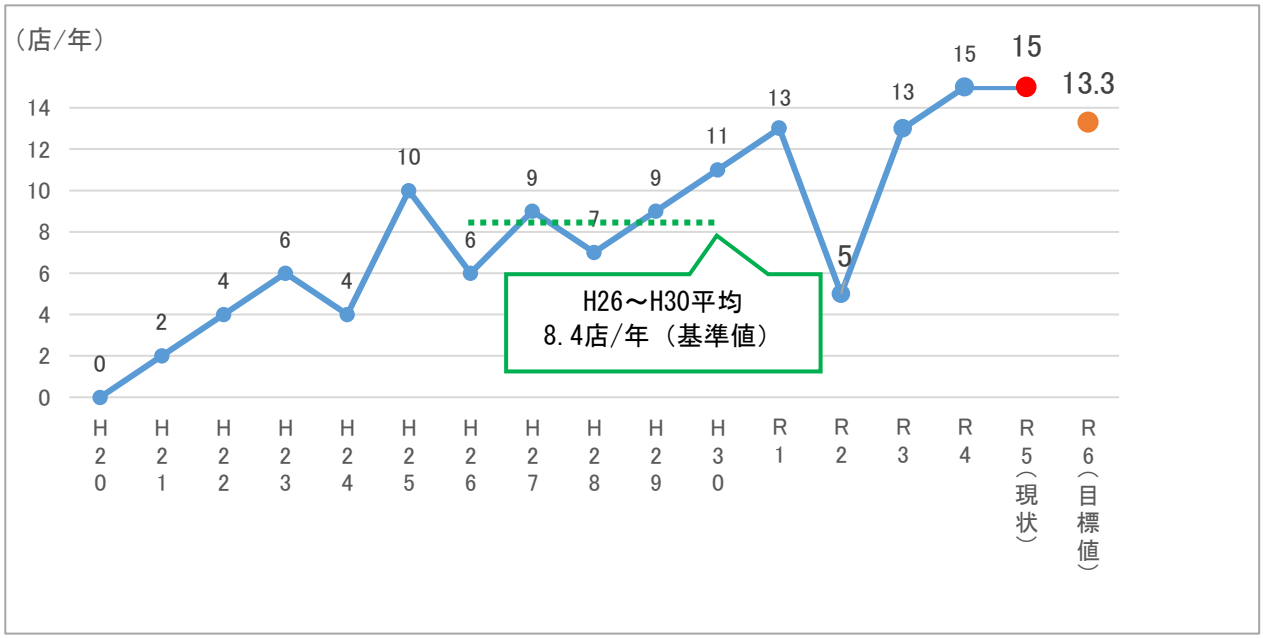


図 12-32 茨木市中心市街地における新規出店の推移

表 12-8 茨木市中心市街地における新規出店数

年	（単位）
H26～H30 平均	8.4（基準年値）
R１	13
R２	5
R３	13
R４	15
R５	15
R６	13.3（目標値） ※ただし R1～R6 平均

令和５年度の「茨木市創業促進事業補助金」及び「茨木市小売店舗改築（改装）事業補助金」の活用件数と、「商店街にぎわい空間整備事業」及び「クリエイターズマーケット整備事業」並びに「まちづくり会社による店舗誘致事業」の中心市街地内での活用状況をみると、茨木市創業促進事業補助金での開業が 13 店舗、茨木市小売店舗改築（改装）事業補助金の活用が２店舗となっており、計画掲載事業を活用した新規出店数は 15 店舗/年の実績となっている。

ＦＩＣベース株式会社による、商店街にぎわい空間整備事業及びクリエイターズマーケット整備事業として、古民家を改装したカフェとハンドメイドの複合施設「omo café+c」が令和４年５月に開業、令和６年１月には、まちづくり会社の新事務所１階に「交流スペース」が整備され、令和５年 11 月のおにクル開館と合わせ、令和４年～５年の直近の２年間に中心市街地活性化エリア全体の集客や滞在の魅力向上に貢献する拠点が複数できた。その結果、新規出店・創業環境としての魅力を維持・向上していることが伺える。

（５）中心市街地を取り巻く商業環境に関する現況分析

中心市街地を取り巻く大規模小売店舗（茨木市内の店舗は売り場面積 1,000 ㎡以上、茨木市周辺の店舗は売り場面積 10,000 ㎡以上のものを対象とする）の立地状況をみると、市内最大のイオンモール茨木店（売り場面積 50,690 ㎡）が中心市街地に隣接している他、中心市街地周辺部に総合スーパーや食品スーパー等も多数立地している。また、近隣市にも百貨店・総合スーパーや、ホームセンターなどの専門店といった、様々な業種の大規模小売店舗があり、平成 27 年には隣接する吹田市に延床面積約 223,000 ㎡の大型複合商業施設「EXPOCITY」が開業するなど、中心市街地周辺には多数の大型商業施設が立地している。

表 12-9 茨木市近隣の大規模小売店舗の立地・規模（2023 年６月時点）

番号	店舗の名称【所在地】	開店年	売り場面積(㎡)	番号	店舗の名称【所在地】	開店年	売り場面積(㎡)
1	イオンモール茨木（イオンスタイル茨木）【茨木市】	2001 年	50,690	22	スギ薬局茨木豊川店、東京靴流通センター【茨木市】	2022 年	1,516
2	平和堂アルプラザ茨木【茨木市】	2000 年	19,521	23	関西スーパー三島丘店【茨木市】	1979 年	1,474
3	茨木ショッピングセンター（イオンスタイル新茨木）【茨木市】	1986 年	12,000	24	郡山団地マーケット（食彩マーケット郡山）【茨木市】	1971 年	1,309
4	イオンタウン茨木太田【茨木市】	2021 年	11,500	25	阪急オアシス茨木駅前店【茨木市】	2020 年	1,230
5	茨木ショッピングプラザ【茨木市】	2000 年	7,411	26	業務スーパー茨木上穂東店【茨木市】	2024 年	1,656
6	ニトリ茨木北店【茨木市】	2004 年	6,840	27	ニトリ茨木南目垣店【茨木市】	2023 年	5,066
7	MEGA ドン・キホーテ茨木店【茨木市】	1986 年	5,917	28	高槻阪急、関西スーパー高槻店【高槻市】	1974 年	33,853
8	ガーデンモール彩都（平和堂フレンドマート彩都店）【茨木市】	2007 年	5,790	29	イオン高槻店【高槻市】	1994 年	24,986
9	ホームセンターコーナン茨木店【茨木市】	1985 年	3,653	30	松坂屋高槻店【高槻市】	1979 年	20,642
10	大阪府食品流通センター【茨木市】	2021 年	3,607	31	ホームセンターコーナン高槻城西店【高槻市】	2003 年	14,310
11	ホームセンターコーナン茨木安威店【茨木市】	1996 年	3,572	32	（アクトアモーレ）平和堂アルプラザ高槻【高槻市】	2004 年	13,820
12	ロピア茨木東太田店【茨木市】	2024 年	3,537	33	高槻デポマート（ホームセンターコーナン高槻上牧店）【高槻市】	2000 年	12,436
13	茨木トップセンター（平和堂真砂店）【茨木市】	1987 年	3,309	34	ホームセンターコーナン高槻上牧店【高槻市】	2000 年	14,553
14	茨木ショップタウン【茨木市】	1970 年	2,900	35	摂津富田ビル（イオンフードスタイル摂津富田店）【摂津市】	1980 年	10,977
15	ジョーシン茨木店【茨木市】	2019 年	2,854	36	カインズ高槻店【高槻市】	2008 年	10,919
16	ロサヴィアいばらき【茨木市】	1991 年	2,440	37	ﾃｯｸﾗﾝﾄﾞ高槻大塚本店、ﾆﾄﾘ高槻店【高槻市】	2004 年	10,800
17	イングイバラキ（キリン堂沢良宜店）【茨木市】	1997 年	2,231	38	ららぽーと EXPOCITY【吹田市】	2015 年	61,000
18	ラ・ムー彩都店【茨木市】	2019 年	2,044	39	吹田さんくす（イオン吹田店）【吹田市】	1979 年	20,600
19	コープ茨木白川【茨木市】	－	1,644	40	イズミヤ千里丘店【吹田市】	1976 年	15,488
20	ダイエー上穂積店・イオンフードスタイル【茨木市】	1996 年	1,643	41	トナリエ南千里アネックス【吹田市】	1987 年	14,690
21	ビエラ茨木新中条（デイリーカナートイズミヤ新中条店）【茨木市】	2019 年	1,636	42	イオン北千里店【吹田市】	1994 年	14,000

※茨木市内の店舗は売り場面積 1,000 ㎡以上、茨木市周辺の店舗は売り場面積 10,000 ㎡以上の店舗を掲載

（資料：全国大型小売店総覧、2023 年版）

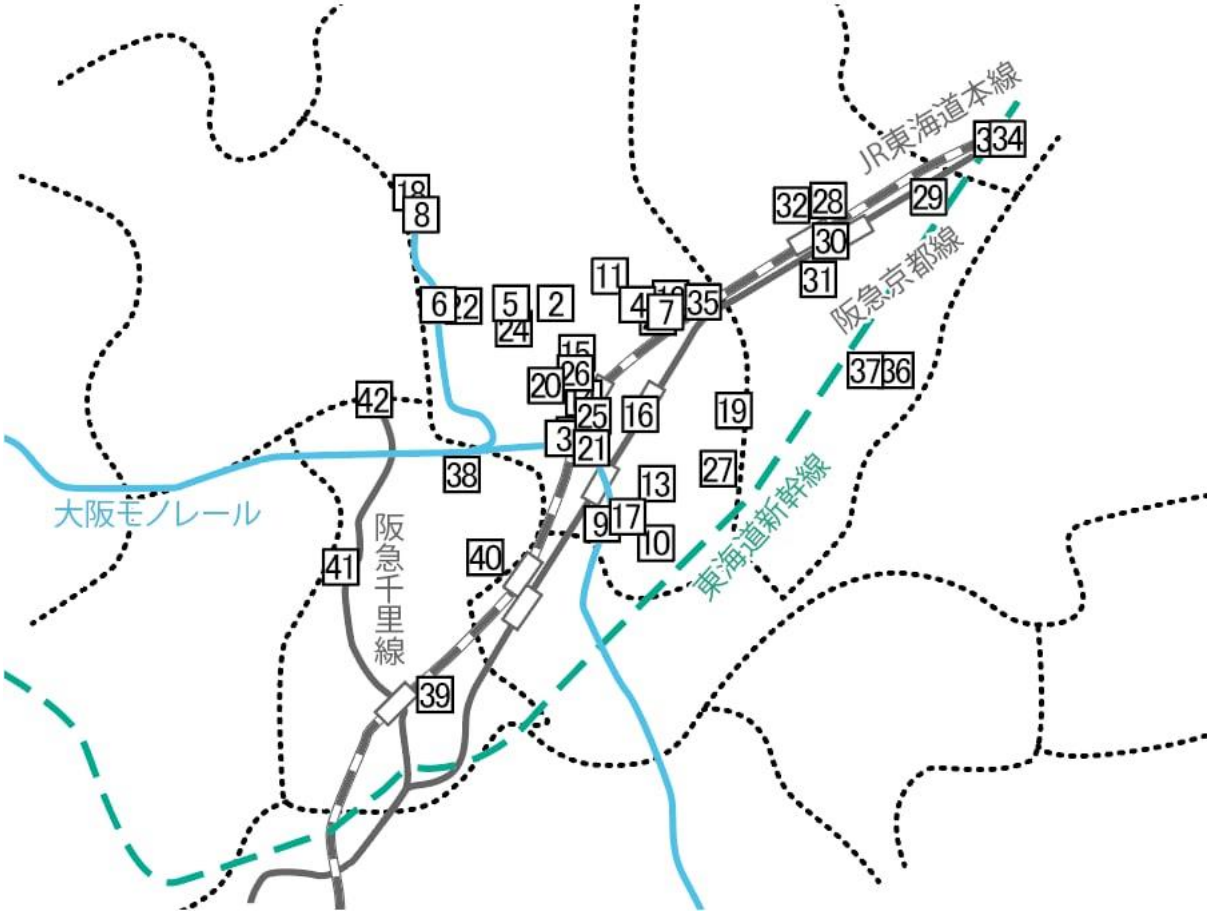


図 12-33　中心市街地を取り巻く大規模小売店舗の立地状況

（６）交通量に関する現況分析

①鉄道

市内では、阪急電鉄㈱、西日本旅客鉄道㈱および大阪モノレール㈱の３社の鉄道路線が運行しており、ＪＲ東海道本線（茨木駅・ＪＲ総持寺駅）、阪急京都線（茨木市駅、南茨木駅、総持寺駅）、大阪モノレール（宇野辺駅、南茨木駅、沢良宜駅、彩都西駅、豊川駅、阪大病院前駅）が整備され、大阪市内や京都市内、大阪国際空港（伊丹空港）等を結んでいる。

市内 11 駅の中で、乗降客数の統計数値が最も多いのは阪急茨木市駅であるが、乗客数だけが公開されているＪＲ茨木駅も相当程度の乗降客数が見込まれる。

また、市内各駅の年間利用者数の推移をみると、全体的に新型コロナウイルスの影響を大きく受けていることがわかる。少しずつ以前の乗降客数に戻ってきているが、オンラインでの授業やテレワークなど暮らし方の変化による影響が今後も乗降客数に響く可能性も考えられる。

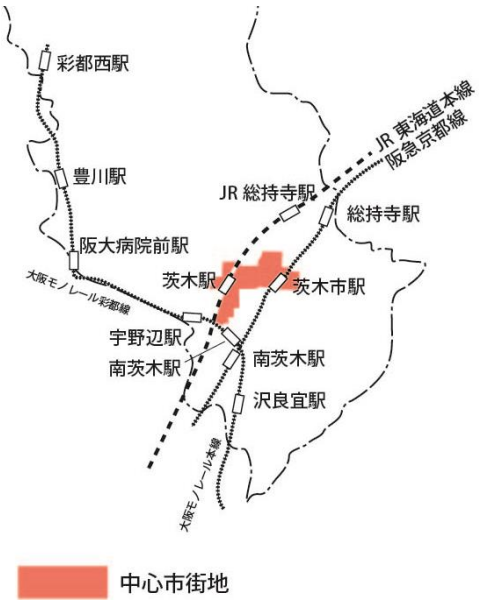


図 12-34 本市内の鉄道路線図

表 12-10 茨木市内に位置する鉄道各駅の乗降者数（単位：千人）

区分			平成 30 年度	令和元年度	令和２年度	令和３年度	令和４年度
ＪＲ	茨木駅	乗車	17,873	17,657	13,180	13,819	15,177
		降車	－	－	－	－	－
	ＪＲ総持寺駅	乗車	1,662	2,761	2,317	2,781	3,220
		降車	－	－	－	－	－
阪急	茨木市駅	乗車	13,058	12,687	9,135	9,616	10,745
		降車	13,628	13,454	9,741	10,334	11,683
	総持寺駅	乗車	3,746	2,973	2,338	2,494	2,711
		降車	3,861	3,082	2,462	2,629	2,883
	南茨木駅	乗車	8,815	8,693	6,634	6,710	7,669
		降車	9,183	9,117	6,865	7,051	8,222
モノレール	宇野辺駅	乗車	1,414	1,396	1,109	1,178	1,309
		降車	1,354	1,345	1,081	1,156	1,275
	南茨木駅	乗車	5,683	5,650	4,255	4,545	5,192
		降車	5,528	5,546	4,179	4,474	5,107
	沢良宜駅	乗車	678	690	615	660	728
		降車	641	657	586	633	704
	阪大病院前駅	乗車	1,418	1,490	1,183	1,303	1,431
		降車	1,458	1,521	1,201	1,308	1,452
	豊川駅	乗車	565	552	454	475	517
		降車	552	533	438	459	500
	彩都西駅	乗車	1,861	1,976	1,553	1,594	1,789
		降車	1,888	1,994	1,575	1,625	1,834

（資料：茨木市統計書、令和５年度）

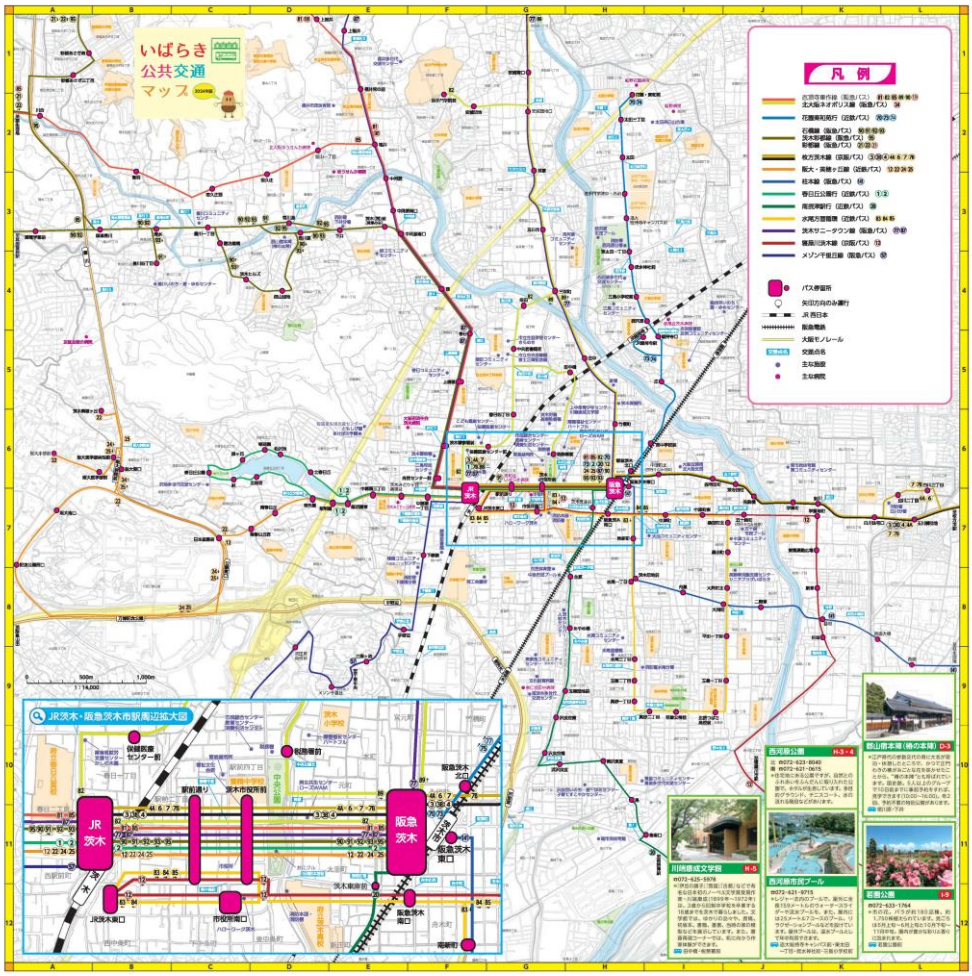
※ＪＲ各駅は、降車の集計は行っていない。

※ＪＲ総持寺駅は、平成 30 年３月 17 日に開業

②路線バス

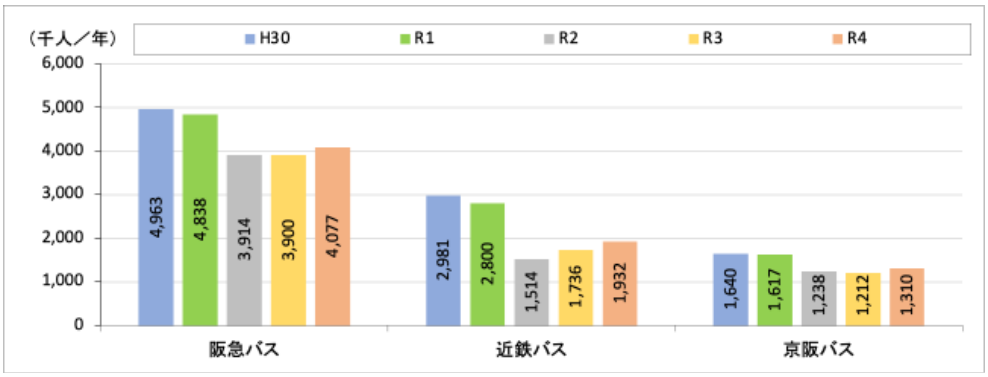
市内の路線バスは阪急バス、近鉄バス、京阪バスの３社が運行しており、阪急バスが中心部と北部、近鉄バスが中心部と南部、京阪バスが中心部と南東部との間の地域を主に運行している。

また、各社の路線バス利用者数の推移は、阪急バス及び京阪バスは横ばい傾向であるが、近鉄バスは令和４年で増加傾向を示している。



（資料：いばらき公共交通マップより抜粋）

図 12-35　市内の路線バス運行図



（資料：茨木市統計書　令和５年度）

※市内のバス停の乗車人数を合計

図 12-36　茨木市内路線バス 事業者別の年間乗車人数

③平日昼間の歩行者通行量

中心市街地における「平日昼間の歩行者通行量」に関する調査を、平成 29 年から毎年 11 月に中心市街地内の 10 地点において午前 7 時から午後 7 時までの 12 時間で計測を行っている。

表 12-11　歩行者通行量調査方法

調査方法	歩行者・自転車通行者、毎年 11 月の平日に中心市街地内 10 地点において午前 7 時から午後 7 時までの 12 時間計測
調査月	令和 5 年 11 月
調査主体	茨木市
調査対象	中心市街地内 10 地点（A① ＪＲ茨木駅商店街エスカレーター、A② ＪＲ茨木駅商店街居酒屋前、B① ＪＲ茨木駅阪急オアシス前エスカレーター、B② ＪＲ茨木駅阪急オアシス前、C　ＪＲ茨木駅立命館方面エスカレーター、D 市民会館跡地、E①本通り商店街（阪急茨木市駅方面）、E②本通り商店街（城跡方面）、F 阪急茨木市駅商店街側、G 阪急茨木市駅市役所側）

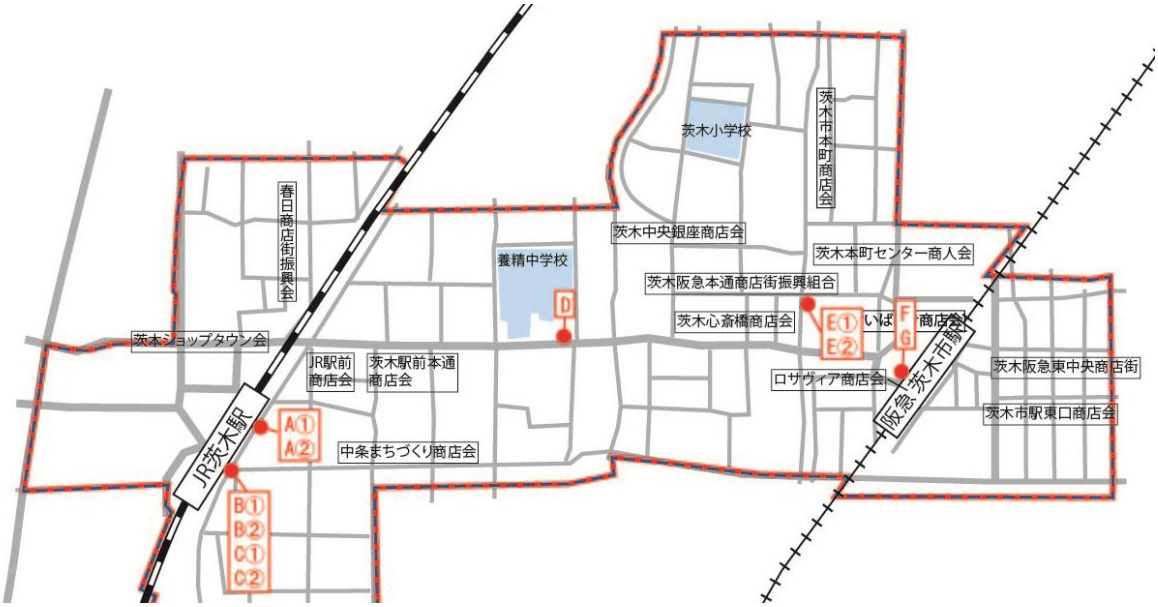


図 12-37　歩行者通行量調査地点図

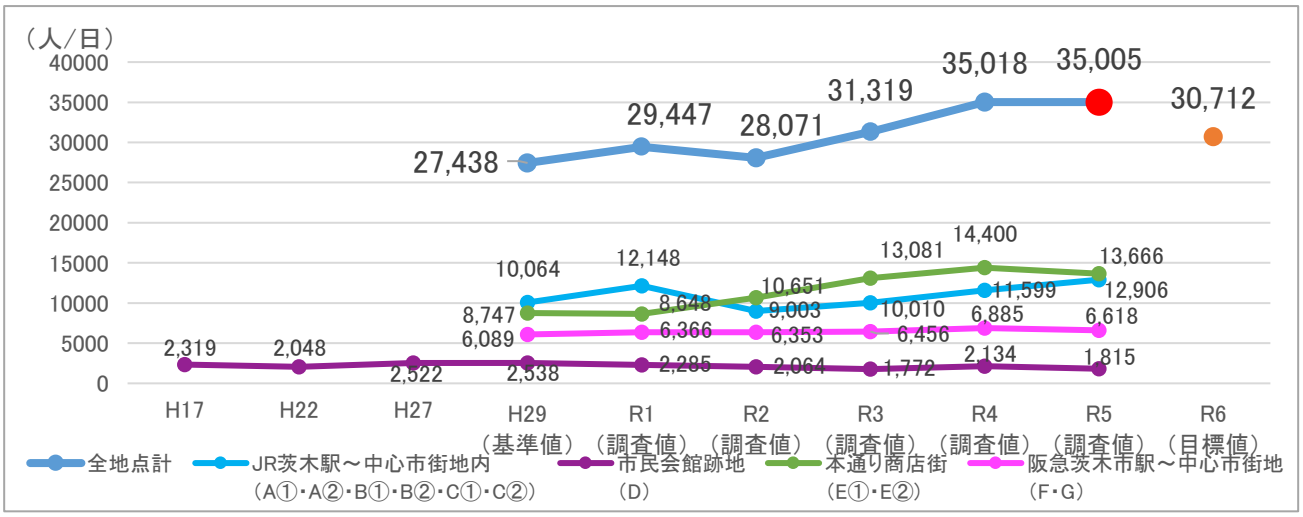


図 12-38　中心市街地エリアの平日昼間の歩行者通行量の推移

表 12-12 中心市街地エリアの平日昼間の歩行者通行量（9 時～17 時までの通行量）

		H29 （基準値）	H30 （調査値）	R1 （調査値）	R2 （調査値）	R3 （調査値）	R4 （調査値）	R5 （調査値）
A①	JR茨木駅商店街側 エスカレーター	2,316	1,733	1,833	1,904	1,870	2,198	2,150
A②	JR茨木駅商店街側 居酒屋前	261	168	247	228	188	195	174
B①	JR茨木駅阪急オアシス前エスカレーター	2,039	1,785	2,758	2,375	2,362	2,446	2,794
B②	JR茨木駅阪急オアシス前	963	658	1,490	1,000	849	1,043	1,258
C①②	JR茨木駅立命館方面エスカレーター	4,485	748	5,820	3,496	4,741	5,717	6,530
D	市民会館跡地	2,538	3,315	2,285	2,064	1,772	2,134	1,815
E①	本通り商店街 （阪急茨木市駅方面）	7,573	7,888	8,129	8,609	9,179	8,624	7,985
E②	本通り商店街 （城郭方面）	1,174	2,504	519	2,042	3,902	5,776	5,681
F	阪急茨木市駅 商店街側	4,109	4,445	3,867	3,557	3,616	3,877	3,644
G	阪急茨木市駅 市役所側	1,980	2,774	2,499	2,796	2,840	3,008	2,974

「平日昼間の歩行者通行量」では、調査開始時の平成 29 年度の 27,438 人/日を基準年値とし、令和６年度の 30,712 人/日を目標値としている。令和５年度では、目標値を上回り 35,005 人/日と、令和４年度と比較して概ね横ばいの結果となった。

各調査地点の増減をみると、ＪＲ茨木駅の立命館大学方面への人流３地点以外は微減傾向にあるが、数値としては令和４年度からの高い水準を維持している状況であり、エリア内での人口増加の影響が、全体として継続していることが推察される。

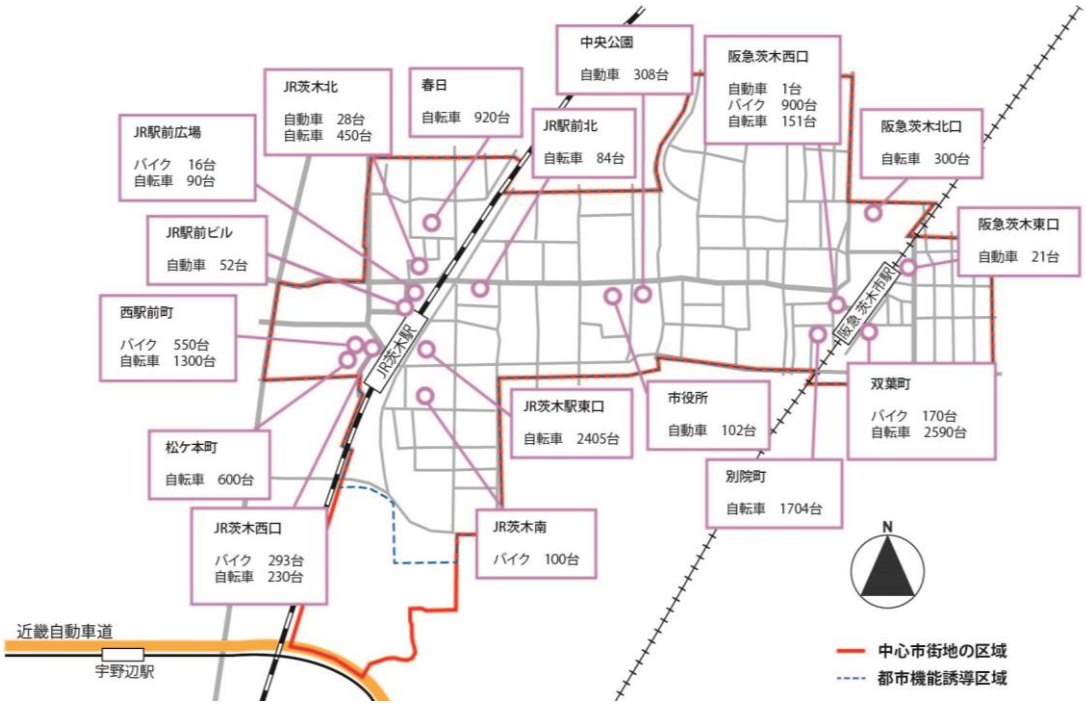
ＪＲ茨木駅周辺での「平日昼間の歩行者通行量」の増加については、新型コロナウイルスが５類感染症へ移行し、各種行動制限が本格的に緩和されたことで大学を中心に通勤・通学の鉄道利用者が戻り、通行量も増加したものと考えられる。

特に減少率が高かった調査地点は、中心市街地の中央に位置する市民会館跡地地点で前年度比-15%となった。この要因として、「おにクル」開館直前に本調査が行われたため、施設整備に伴い各種施設が閉鎖され、利用できなかったことによる影響があったものと推察される。

しかし、調査実施後の令和５年 11 月 26 日に開館した「おにクル」では、開館日に想定を大きく上回る 15,000 人が来館、開館から１か月で累計来館者数が 19 万人を超える等、高い集客効果を誇っており、今後は施設整備による波及効果をエリア内の回遊性の向上に繋げていくことなどを目指している。

④駐車場・駐輪場

中心市街地における主な市営駐車場、駐輪場の整備状況をみると、自動車約 720 台、バイク約 2,000 台、自転車約 10,000 台の駐車･駐輪スペースが整備されている。



（資料：交通政策課、令和６年６月）

図 12-39 中心市街地の市営駐車場･駐輪場位置及び収容可能台数

表 12-13 茨木市駐車場収容台数

令和６年３月１日現在

駅	No.	駐車場名	自動車	バイク	自転車	計
JR茨木駅周辺	1	JR駅前ビル駐車場	52	0	0	52
	2	西駅前町自転車駐車場	0	550	1,300	1,850
	3	松ヶ本町自転車駐車場	0	0	600	600
	4	JR茨木西口自転車駐車場	0	293	230	523
	5	春日自転車駐車場	0	0	920	920
	6	JR茨木北駐車場	28	0	450	478
	7	JR茨木駅東口自転車駐車場	0	0	2,405	2,405
	8	JR茨木南自転車駐車場	0	100	0	100
	9	JR駅前北自転車駐車場	0	0	84	84
	10	JR駅前広場自転車駐車場	0	16	90	106
	計		80	959	6,079	7,118
阪急南茨木駅周辺	11	南茨木駅前(第 1)自転車駐車場	0	30	700	730
		南茨木駅前(第 2)自転車駐車場	0	0	1,200	1,200
		南茨木駅前(第 3)自転車駐車場	0	30	300	330
		南茨木駅前(第 4)自転車駐車場	0	30	440	470
		南茨木駅前(第 5)自転車駐車場	0	0	210	210
		計	0	90	2,850	2,940
	12	南茨木駅北自転車駐車場(1.2 階)	0	49	640	689
		南茨木駅北自転車駐車場(3 階)	0	0	250	250
		計	0	49	890	939
	計		0	139	3,740	3,879
モノレール各駅	13	モノレール沢良宜駅自転車駐車場	0	105	480	585
	14	モノレール宇野辺駅(第 1)自転車駐車場	0	55	480	535
		モノレール宇野辺駅(第 2)自転車駐車場	0	0	215	215
		計	0	55	695	750
	15	モノレール阪大病院前駅自転車駐車場	0	50	100	150
	16	モノレール豊川駅自転車駐車場	0	35	248	283
	17	モノレール彩都西駅自転車駐車場	0	78	410	488
	計		0	323	1,933	2,256
阪急茨木市駅周辺	18	阪急茨木西口駐車場	1	900	151	1,052
	19	別院町自転車駐車場(西棟)	0	0	1,090	1,090
		別院町自転車駐車場(東棟)	0	0	614	614
		計	0	0	1,704	1,704
	20	阪急茨木北口駐車場	0	0	300	300
	21	阪急茨木東口駐車場	21	0	0	21
	22	双葉町駐車場	0	170	1,811	1,981
		(新)双葉町駐車場	0	0	779	779
		計	0	170	2,590	2,760
	計		22	1,070	4,745	5,837
阪急総持寺駅周辺	23	総持寺自転車駐車場	0	210	2,390	2,600
	24	総持寺駅南駐車場	40	50	600	690
	計		40	260	2,990	3,290
JR総持寺駅	25	JR総持寺駅南自転車駐車場	0	52	685	737
	26	JR総持寺駅北自転車駐車場	0	0	85	85
			0	52	770	822
市内	27	中央公園駐車場	308	0	0	308
	28	市役所駐車場	102	0	0	102
	計		410	0	0	410
合　計			552	2,803	20,257	23,612

（資料：交通政策課）

（７）各種施設の利用に関する現況分析

①主な公共施設の年間利用件数

中心市街地内の主な公共施設の年間利用件数の推移をみると、最も利用件数の多い市民総合センター（クリエイトセンター）では、平成 26 年から令和元年にかけて緩やかに減少し、令和２年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて大幅に減少した。令和３年以降は徐々に回復し、令和５年は約 18,600 件（時間）の利用があった。

福祉文化会館は、平成 28 年から令和２年にかけて減少傾向となっていたが、令和３年以降は増加傾向が強まっており、市民会館の施設利用が流れているものと思われる。

令和５年 11 月におにクルが開館し、約６か月で来場者が 100 万人を突破するなど予想を大幅に上回る数値で推移している。令和６年６月に福祉文化会館が閉鎖したことにより、今後もおにクルの施設利用がさらに活発になることが見込まれることから、多くの市民等による利活用が期待できる。

５施設の合計利用件数の推移をみても、今後は福祉文化会館の閉鎖による影響が出てくる恐れもあることから、中心市街地における市民活動の場が失われることがないようにすることが重要である。

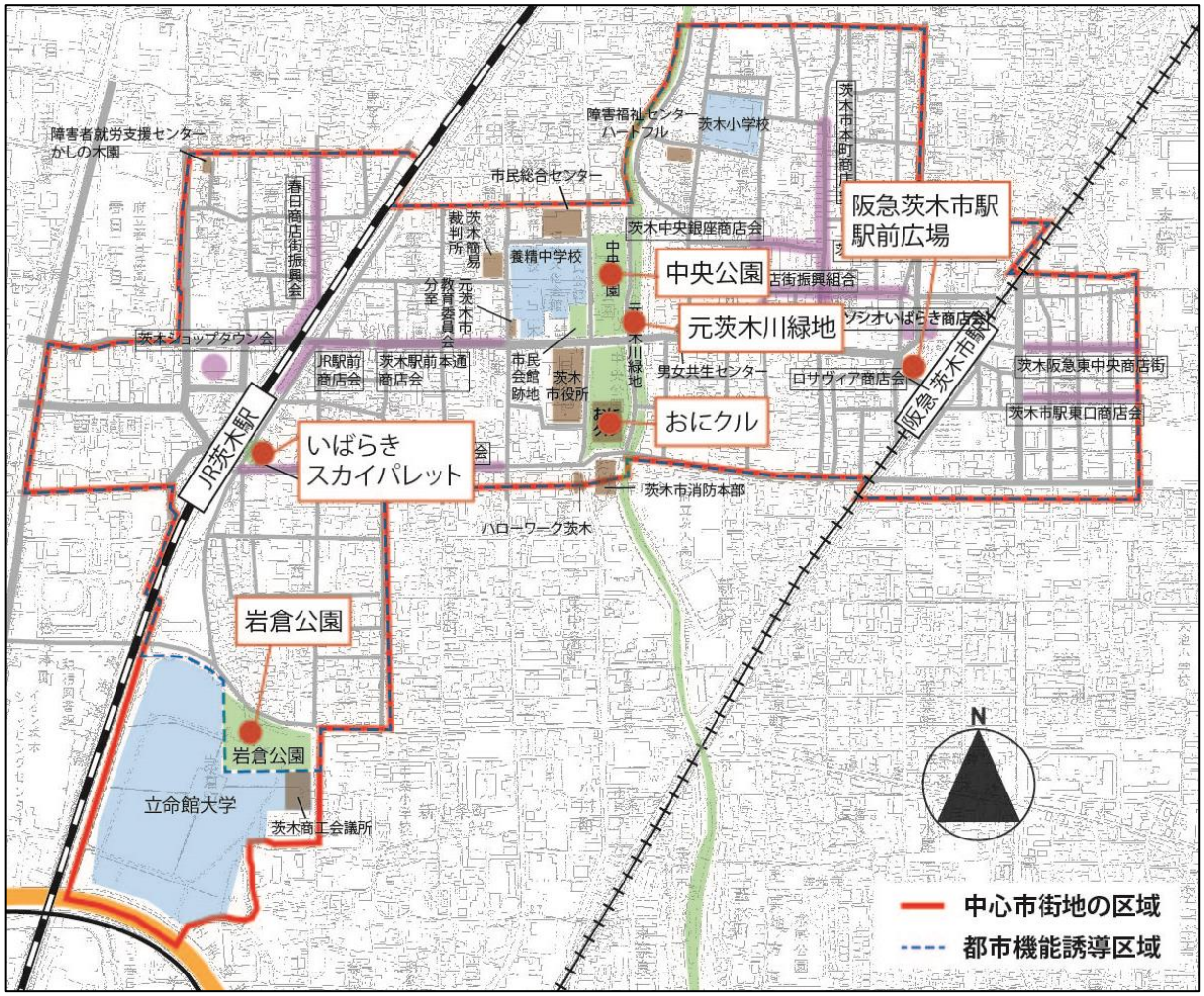
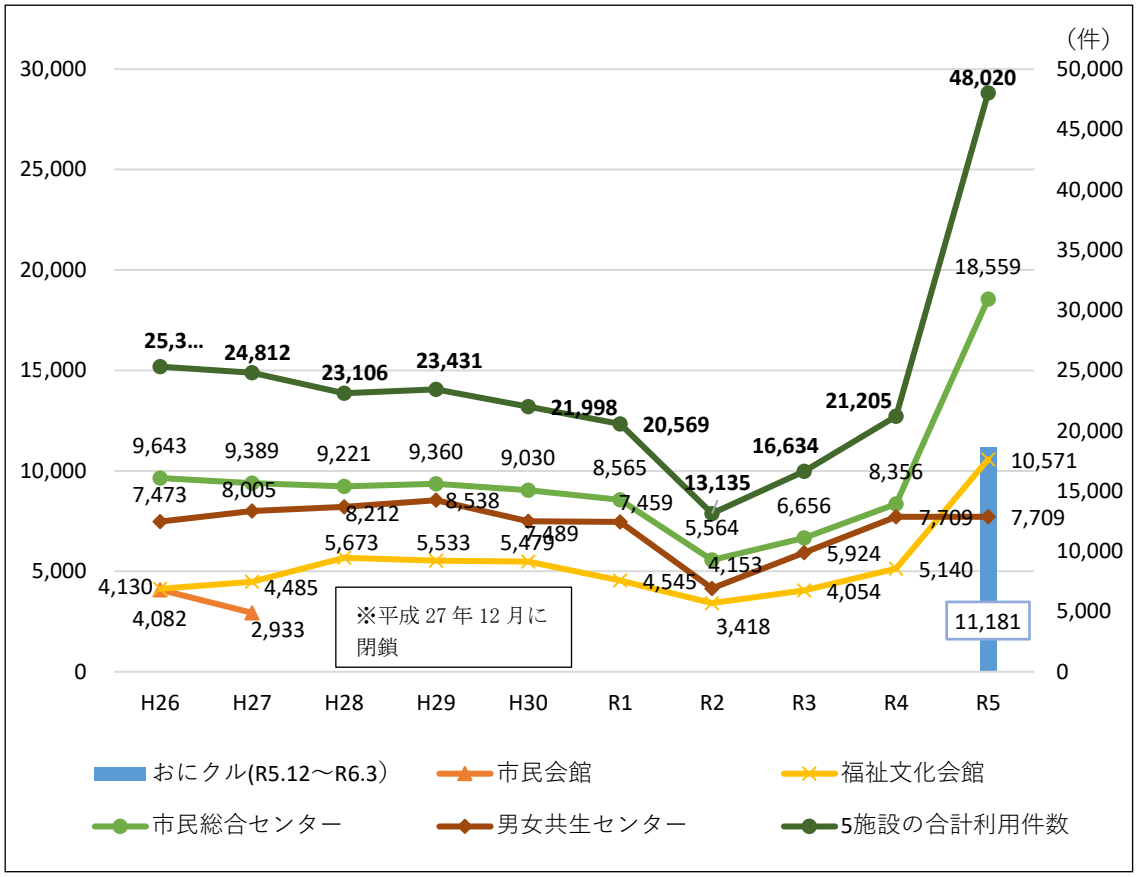


図 12-40　中心市街地の主な公共施設

表 12-14　中心市街地の主な公共施設

名称	施設
福祉文化会館 ＊Ｒ６年６月閉館	文化ホール、会議室
市民総合センター ＊Ｈ23年施設再編	センターホール、多目的ホール、その他一般利用施設、教育センター、労働センター、消費生活センター
男女共生センター	ローズホール、ワムホール、会議室・セミナー室・研修室、その他貸室
文化・子育て複合施設おにクル ＊Ｒ５年11月開館	ホール、図書館、プラネタリウム、市民活動センター、子育て支援コーナー



（資料：文化振興課、人権・男女共生課、共創推進課、令和５年）

注記：福祉文化会館及び市民総合センターについては令和５年から集計方法の変更があった。

（件数から時間数を計上）おにクルの単位は「件」

図 12-41　公共施設利用状況（主な公共施設の利用件数）

②公共空間の活用件数

中心市街地の公共空間（公園、道路）の平成 27 年～令和５年の過去９年間のイベントなどでの活用状況をみると、いばらきスカイパレットで 61 件（平均 6.7 件/年）、中央公園グラウンドで 453 件（平均 50.3 件/年）、立命館大学と一体的に整備された岩倉公園で 64 件（平均 7.1 件/年）、令和５年 11 月に開館したおにクルで 29 件となっている。

IBALAB@広場は、社会実験のため、公共空間活用件数には計上しないが、令和２年～５年の４年間で、568 件（142 件/年）のイベントが開催されている。道路沿いから見えやすい立地に位置しているため、中心市街地エリアではいつもどこかでイベントが開催されているという認識を市民に根付かせるような役割を担っている。

表 12-15 公共空間活用件数

	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	合計
いばらき スカイパレット	6	11	13	10	5	1	1	3	11	61
中央公園 グラウンド	60	58	72	72	46	20	37	38	50	453
岩倉公園	6	6	6	7	6	11	8	5	9	64
おにクル	－	－	－	－	－	－	－	－	29	29
公共空間活用 社会実験	(0)	(6)	(11)	(2)	(0)	(0)	(0)	(1)	(2)	(19)
合計 （社会実験を除く）	72	69	80	87	57	32	46	46	99	588

【参考】

阪急西口デッキ	－	－	－	－	－	－	－	2	2	4
IBALAB@広場 （社会実験）	－	－	－	－	－	45	84	244	195	568
元茨木川緑地 （参考）	－	－	－	－	7	10	9	7	2	35

（資料：市街地新生課、令和５年）

※阪急西口デッキの活用は合計に含まれるが、他の公共空間と同一イベントまたは同日開催のものは１件として他の公共空間に計上している

※IBALAB@広場の活用は社会実験のため、参考として計測しており、公共空間活用件数としては含まない

※おにクルは、屋外（大屋根広場・芝生広場）の活用を計上している

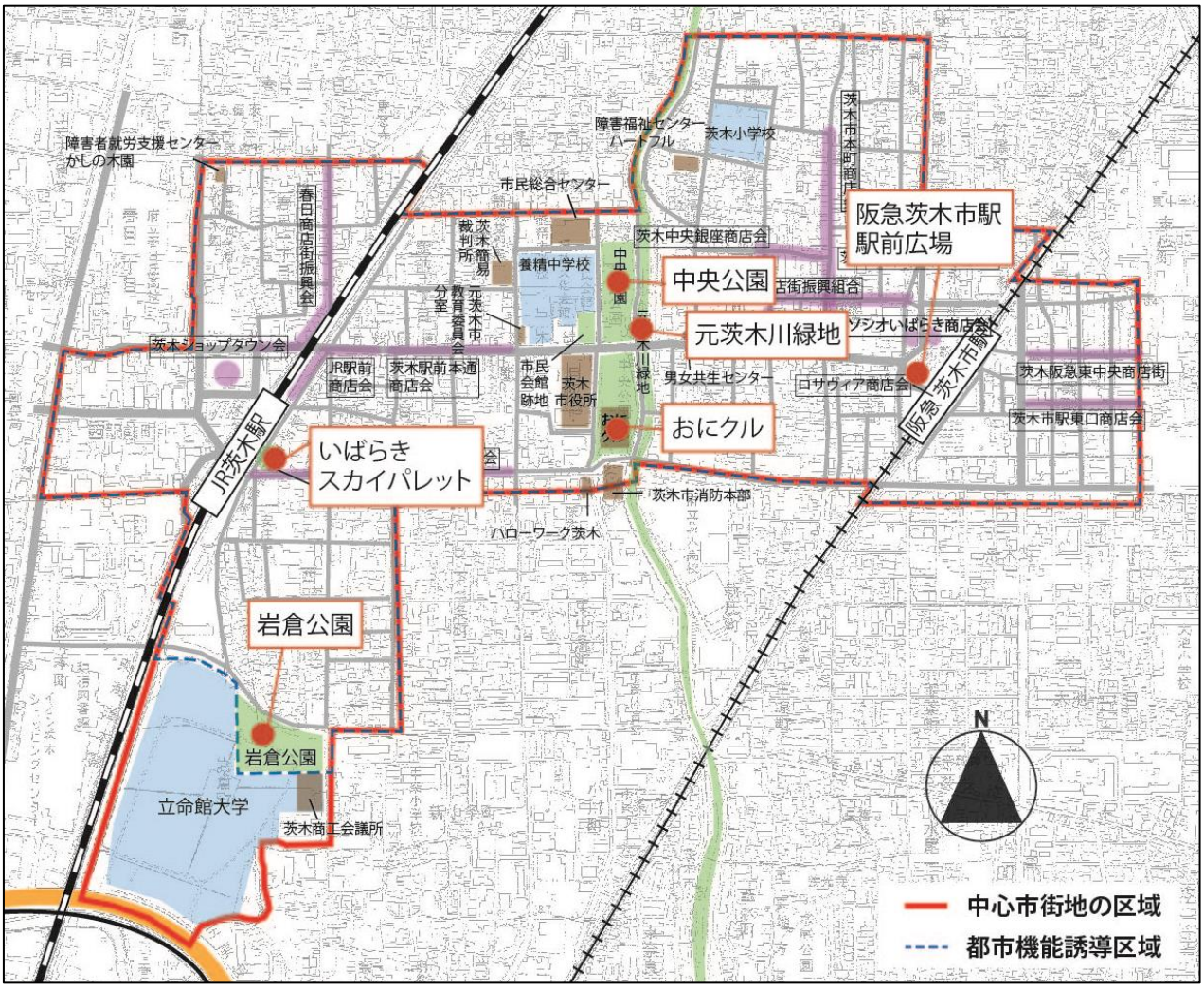


図 12-42 公共空間位置図(再掲)

（８）茨木市の不動産取引の推移

RESAS を活用し、茨木市の不動産取引の動向を見ると、住宅地は大阪府、全国平均より高い価格で取引されている。一方、商業地の価格は大阪府の価格より低く、全国の価格よりも高い価格で概ね推移しているものの、2019 年及び 2022 年では、茨木市の商業地の価格は大幅に増加し、大阪府の価格も超えた。中古マンションなどは大阪府、全国より安い価格で推移している。

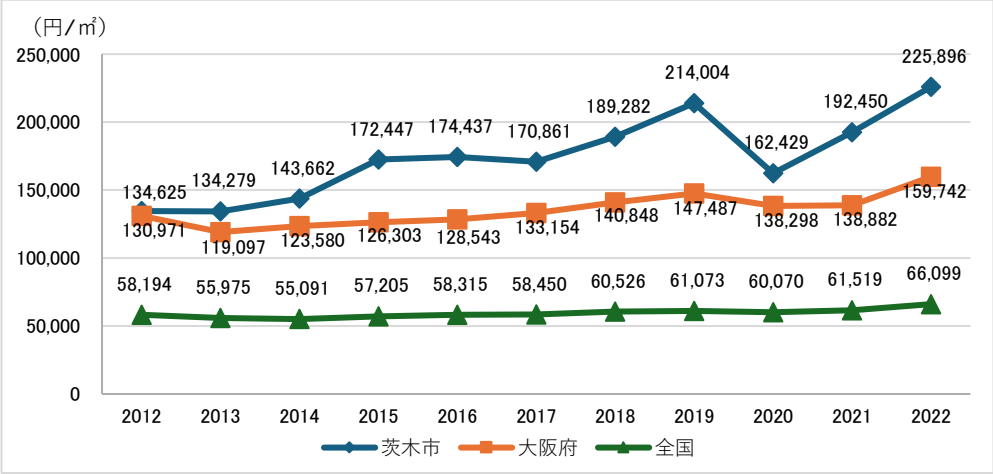


図 12-43　取引面積1平米あたりの取引価格の平均の推移（住宅地）

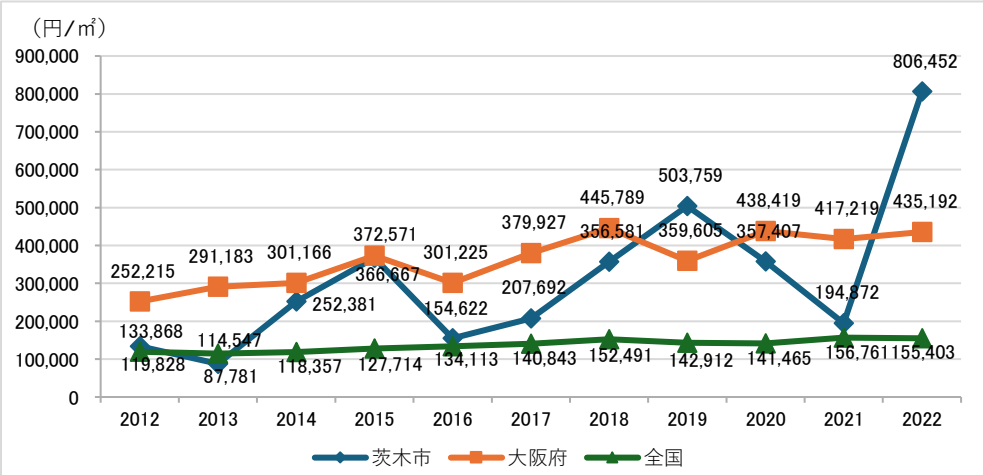


図 12-44　取引面積1平米あたりの取引価格の平均の推移（商業地）

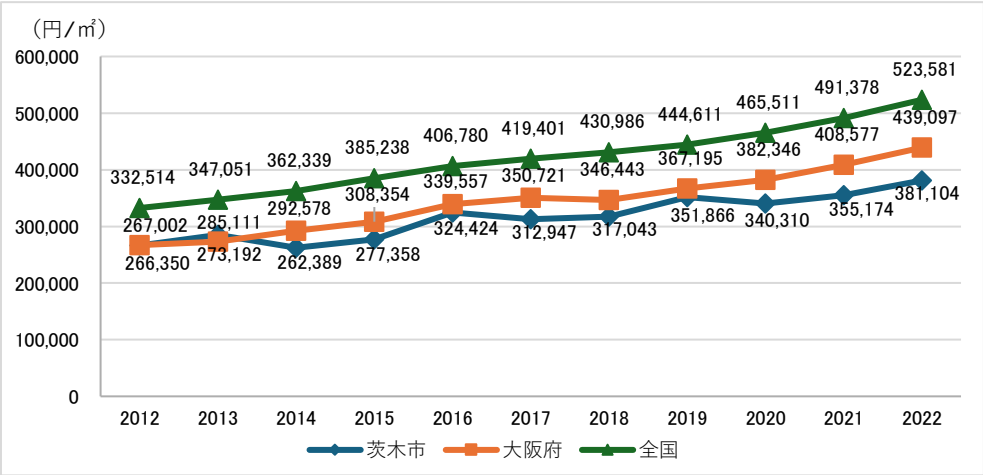


図 12-45　取引面積1平米あたりの取引価格の平均の推移（中古マンションなど）

［３］地域住民のニーズ等の把握・分析

調査概要

①実施期間：令和６年５月 25 日(土)～令和６年６月 10 日(月)
②調査対象者：茨木市に居住する 18 歳以上の市民 2,000 人
③調査手法：調査対象者を無作為に抽出し、郵送により調査票を配布・回収
④回答数：602 票（30.1%）

買い物・消費行動の場所について

中小商店の利用が多いのは「ヘルスケア」「飲食」
中心市街地の利用が多いのは「ヘルスケア」、「アミューズメント」、「食料品、日用雑貨」、「飲食」

普段の買物で利用する店の種類についてみると、「大型店」では、「食料品、日用雑貨」、「衣類、靴、装飾品」、「家具、家電、耐久品」の利用が多く、「中小商店」では、「理・美容院、エステ、マッサージなどヘルスケア」、「飲食、喫茶」が多い。また、普段の買物で利用する店の場所のうち、「中心市街地」が多いのは「理・美容院、エステ、マッサージなどヘルスケア」、「ゲーム・カラオケなど娯楽・アミューズメント」、「食料品、日用雑貨」、「飲食、喫茶」と３割以上、もしくは前後の数値となっている。

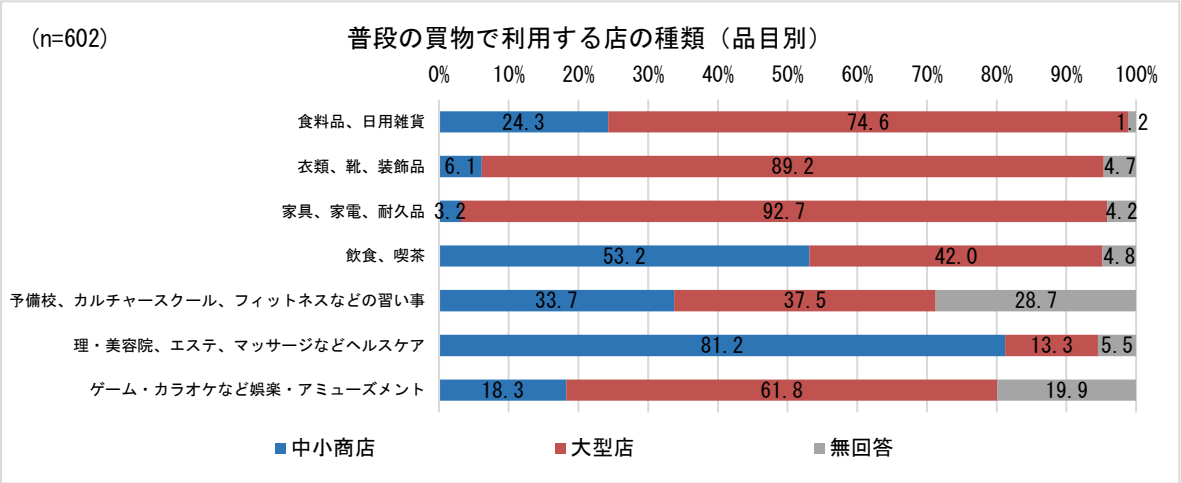


図 12-46　普段の買物で利用する店の種類(品目別)

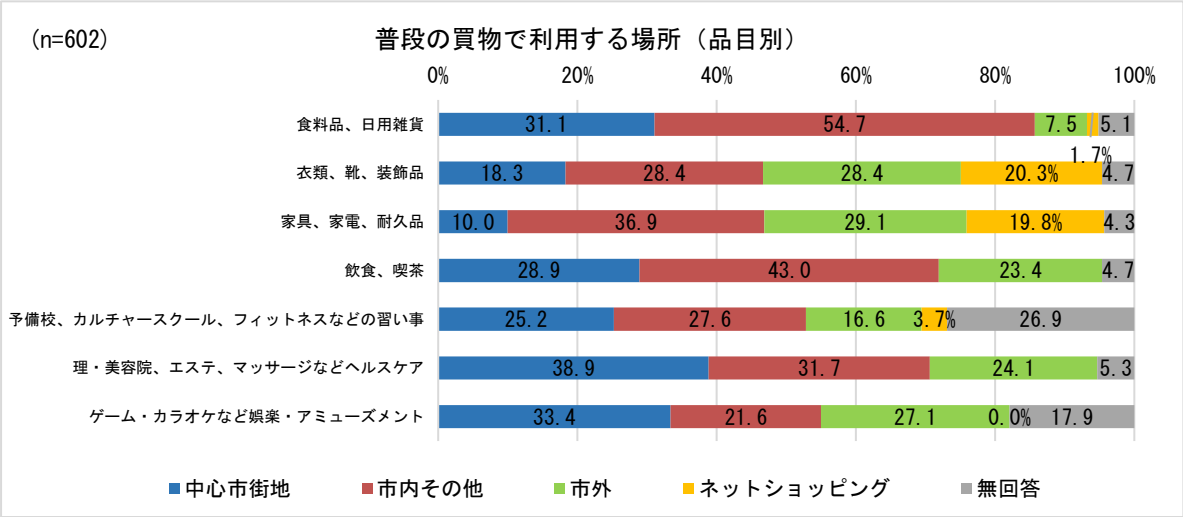


図 12-47　普段の買物で利用する場所(品目別)

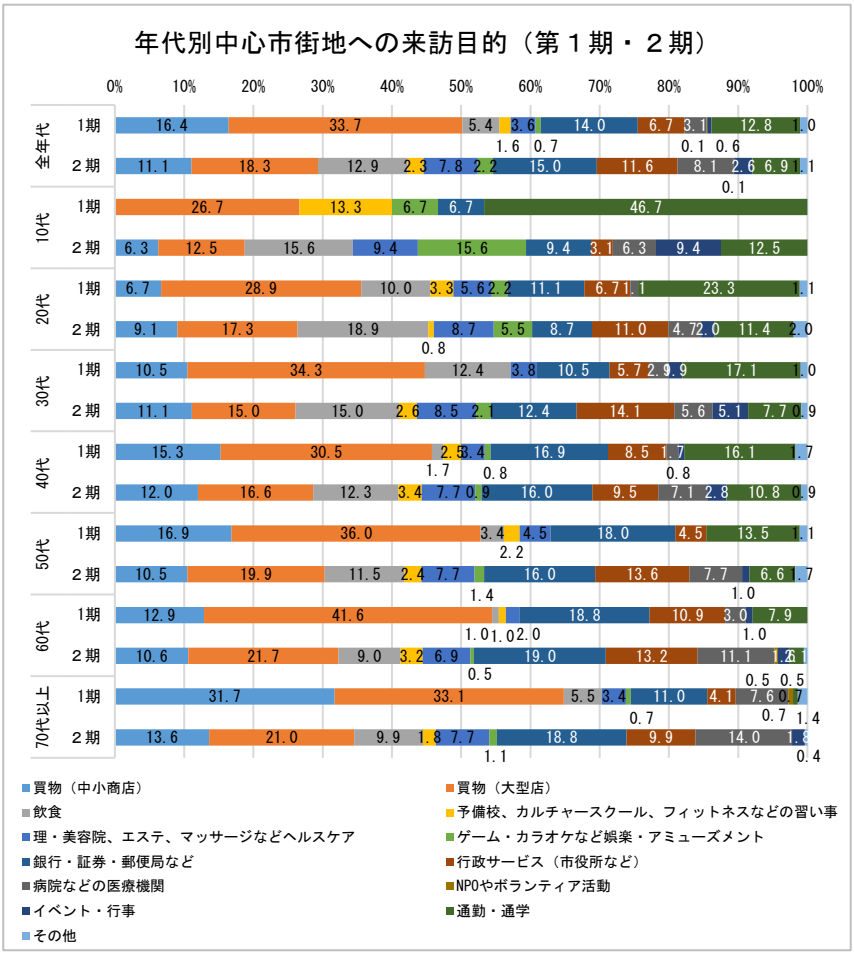
中心市街地への来訪や利用の現状について

「買物」、「通勤・通学」が減り、「飲食」、「ヘルスケア」、「行政サービス」を目的とした来訪が増加
「おにクル」の主な利用世代である 20・30 代で「行政サービス」目的の来訪が増加

中心市街地への来訪目的を第１期計画策定時と今回とで比較すると、「飲食」、「理・美容院、エステ・マッサージなどヘルスケア」、「行政サービス（市役所など）」が他の項目に比べて増えている。一方、「買物（大型店など）」は大幅に減少、「買物（中小商店）」、「通勤・通学」が減少と、買物や通勤・通学での来訪は減っている。

年代別に今回の中心市街地への来訪目的の傾向をみると、「飲食」が他の項目より多いのは 20 代、10 代、30 代となっている。40 代以上の年代では、「買物（大型店）」と「銀行・証券・郵便局など」が他の項目より多い傾向にある。また、「通勤・通学」の減少が顕著なのは 10 代であり、コロナ禍以降の大学等でのオンライン授業の増加といった生活様式の変化が特に学生を中心に現れているものと考えられる。

第１期計画掲載事業に関連するものとしては、主要事業として「おにクル」の開館や omo café+c の開業等が想定されるが、ターゲットとして想定していた子育て世代である 20 代・30 代で「行政サービス（市役所など）」は増加、祖父母世代にあたる 50 代以上でも増加しており、中心市街地への来訪を誘導するという「おにクル」の効果は一定発揮されているものと推察される。omo café+c をはじめとした店舗誘致の効果については、「買物（中小商店）」は全体に減ったものの、「飲食」は増加、特に 20 代・30 代・40 代では他の項目と比べてのポイント数も多い。



※複数回答のため、各年代の総回答数を母数として各項目の割合を算出
※第１期計画策定時の調査では、１位～３位を回答としていたため、１～３位の回答を複数回答として扱い総回答数を算出、母数として今回調査と比較可能な集計を行った
（以下同質問においては同様）

図 12-48　年代別中心市街地への来訪目的（第1期・2期）

中心市街地への交通手段・滞在時間・利用時間帯・利用店舗数

中心市街地への交通手段は「自転車が最も多く、次いで「自動車」が多い
滞在時間は「1～2 時間」が最も多く、来訪時の利用店舗数は「2～3 店舗」
滞在時間帯は午前９時～午後４時の昼間の時間帯が約 75%

中心市街地への交通手段については、「自転車」が最も多く 33.2%。滞在時間については、「1～2 時間」と回答した人が最も多く、37.4%で、３時間までの滞在が８割以上と多く、３時間以上の滞在は２割以下と少ない。滞在時間帯については、「午前９時～正午」と回答した人が最も多く 36.4%であり、午前９時～午後４時の昼間の時間帯が約 75%と多くなっている。中心市街地での利用店舗数については、「2～3 店舗」が最も多く 64.0%と、中心市街地での買物時に、２～３店舗の買い回りをしている人が一定数いるものと推察される。

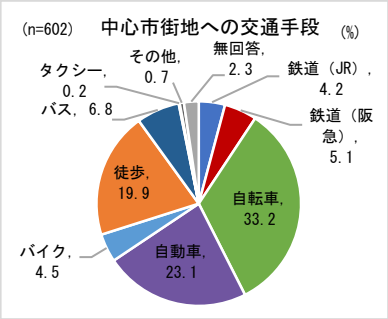


図 12-49 中心市街地への交通手段

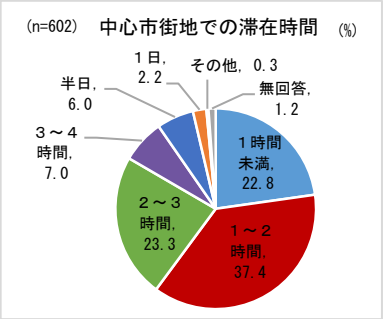


図 12-50 中心市街地での滞在時間

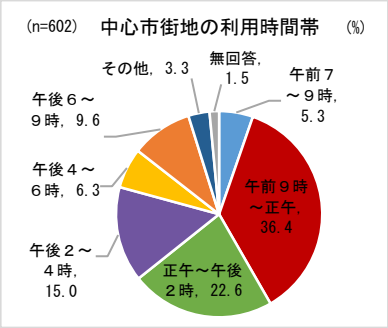


図 12-51 中心市街地の利用時間

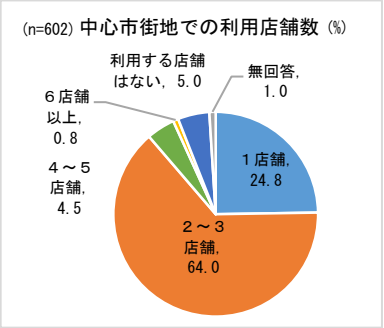


図 12-52 中心市街地内での利用店舗数

過去５年間の主な取組の活性化への効果について

「おにクル」は開館から間もないにも関わらず「効果がある」が５割以上、
取組を知らない人は１割程度と高い認知度と効果の実感
「いばらきスカイパレット」、「IBALAB@広場」、元茨木川緑地の活用については、
効果の実感が２～３割に止まっているものの、「取組を知らない」が３～５割と認知度に課題

過去５年間の主な取組のうち、特に「おにクル」は開館から間もないにも関わらず、市民への認知度も高く、効果が広く実感されていると言える。「いばらきスカイパレット」、「IBALAB@広場」、元茨木川緑地の活用については、効果の実感としては２～３割に止まっているものの、「効果を感じない」との回答は１割程度と低く、「取組を知らない」が３～５割の回答となっており、取組内容ではなく認知度に主な課題があるものと考えられる。

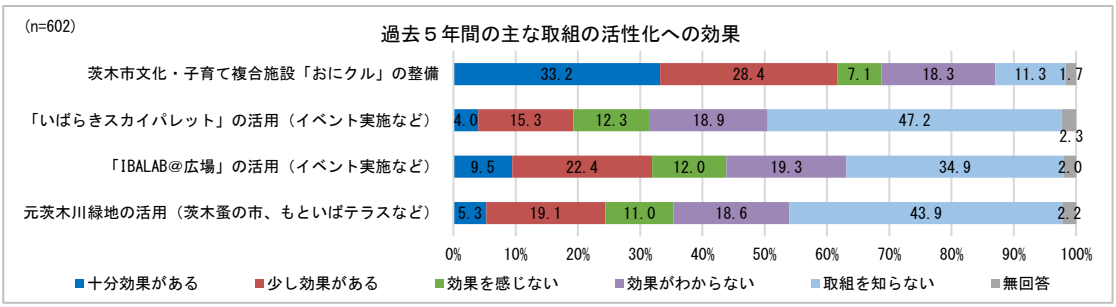


図 12-53 過去5年間の主な取組の活性化への効果

現在の中心市街地の印象

「居住環境（住みごこち）」、「文化施設（図書館・市民活動施設など）」、「日常的な買物（食料品・日用品など）の利便性」が「充実」の上位であり現在の中心市街地の強み・魅力

現在の中心市街地の印象について、「充実」との回答が多い項目は「居住環境（住みごこち）（47.0%）」、「文化施設（図書館・市民活動施設など）（39.9%）」、「日常的な買物（食料品・日用品など）の利便性」が上位となっており、現在の中心市街地の魅力を構成する中心的な要素と考えられる。

一方、「少ない」との回答が多い項目は「市内外から人が訪れる魅力（49.5%）」、「魅力的・個性的な店舗（47.3%）」が上位となっており、現在の中心市街地の弱みと考えられる。

また、第１期計画策定時と今回とで比較すると、「充実」が大幅に増加したのは「居住環境（住みごこち）」と「文化施設（図書館・市民活動施設など）」、「日常的な買物（食料品・日用品など）の利便性」となっている。

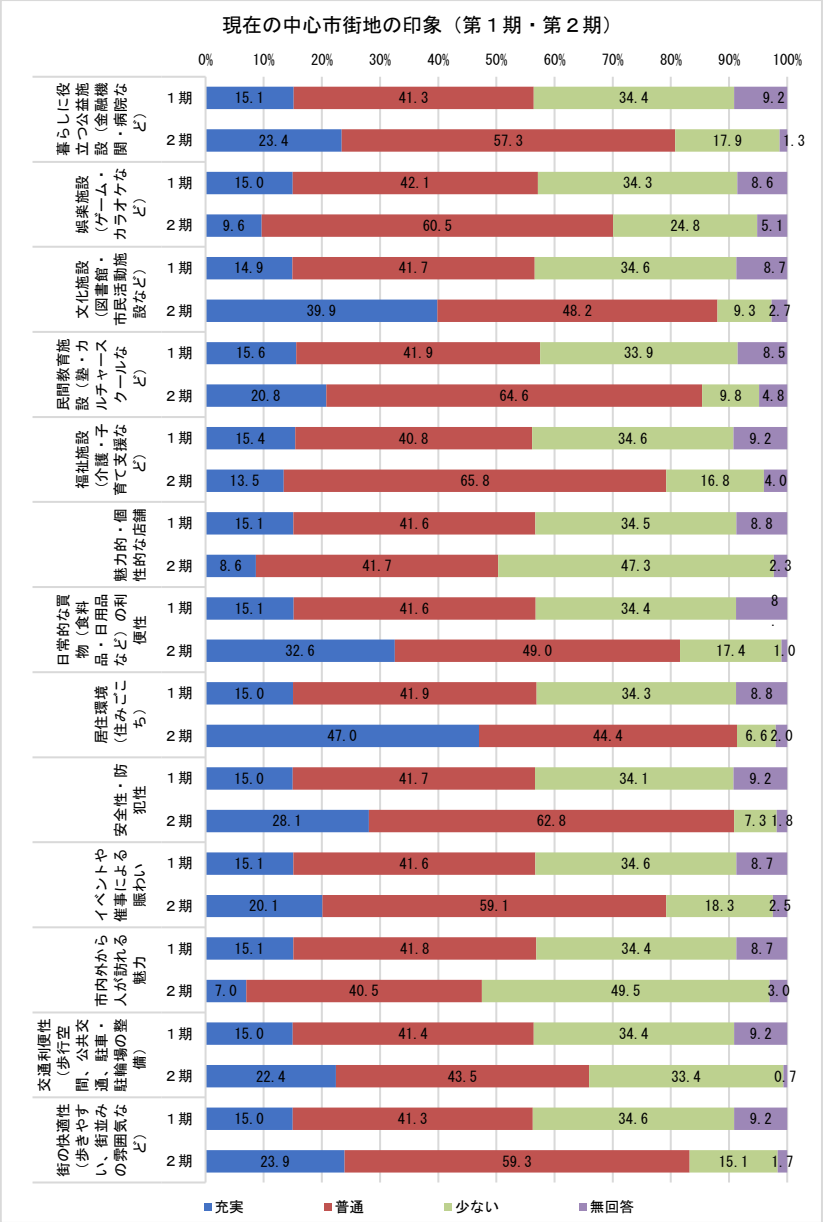


図 12-54 現在の中心市街地の印象（第1期・2期）

※第１期計画策定時の調査では、同質問を「（１）中心市街地の活気の有無」と「（２）その理由　＊今回調査の中心市街地の印象と同じ選択肢　第１位～３位までを回答」としていたため、今回調査の集計については、以下の集計を行った上で比較している。

ⅰ）第１期計画策定時の調査で質問した「（１）中心市街地の活気の有無」については、「活気が増えた」との回答を今回調査の「充実」、「変わらない」との回答を今回調査の「普通」、「衰退した」との回答を今回調査の「少ない」と読みかえた。

ⅱ）「（１）中心市街地の活気の有無」と、「（２）その理由」のクロス集計を行った上で、１～３位の回答は３つまでの選択の複数回答として集計、各項目の回答数の和を母数として割合を算出した。

ⅲ）今回調査（２期）の集計については、各項目回答者数 602 を母数として算出している。（単一回答のため）

エリア別の中心市街地の変化

「市役所周辺エリア」は 75%が活性化の効果を実感、
一方「商店街まちなかエリア」は賑わいの実感に課題

中心市街地の変化についてみると、「市役所周辺エリア」で「活性化した」(36.5%)、及び「少し活性化した」(37.9%) と約 75%が活性化したと回答、多くの市民から活性化の効果が実感されているエリアと言える。一方、「商店街まちなかエリア」では「衰退した」が 18.1%と「活性化した」との回答を上回っており、市民の実感としては賑わいに課題があると言える。

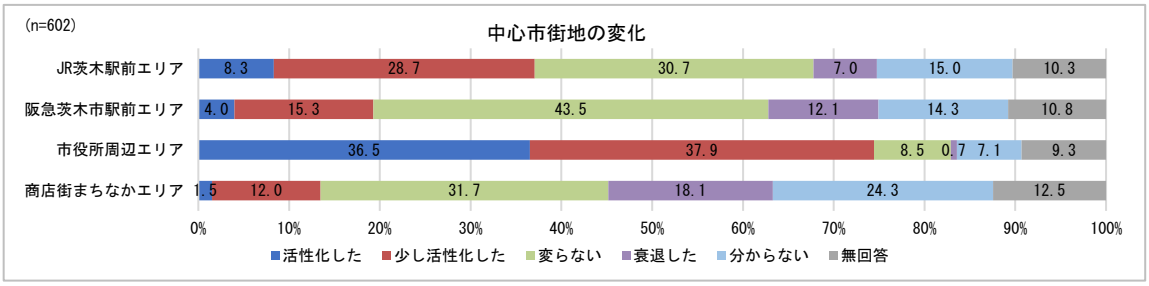


図 12-55 中心市街地の変化

今後中心市街地に欲しい施設等

全エリア共通して民間施設や店舗では「飲食店」、公共施設では「駐車場・駐輪場」の希望が多い

今後中心市街地に欲しい民間施設や店舗は、全エリア共通して４～５割と「飲食店」が他の項目と比べても最も多い。公共施設は、全エリア共通して「駐車場・駐輪場」が多い。

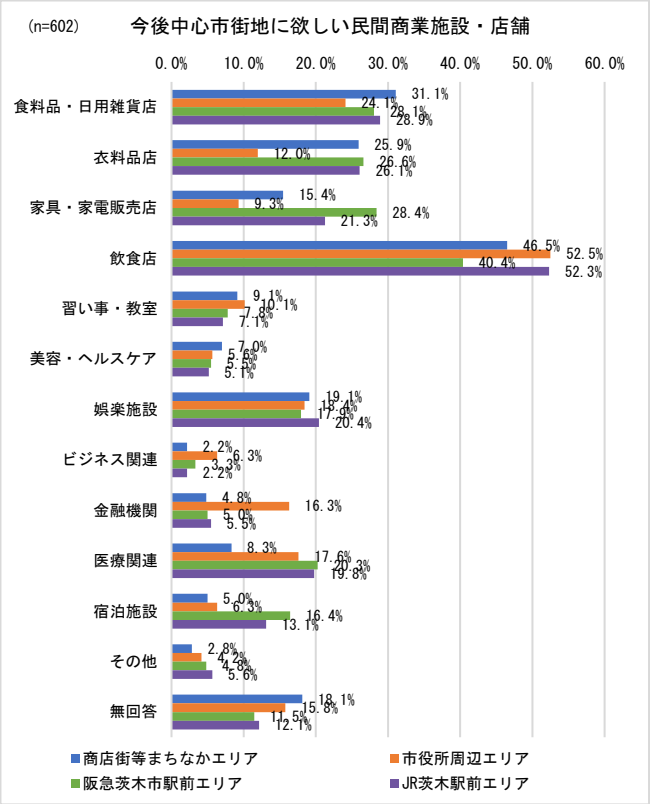


図 12-56 今後中心市街地に欲しい民間商業施設･店舗

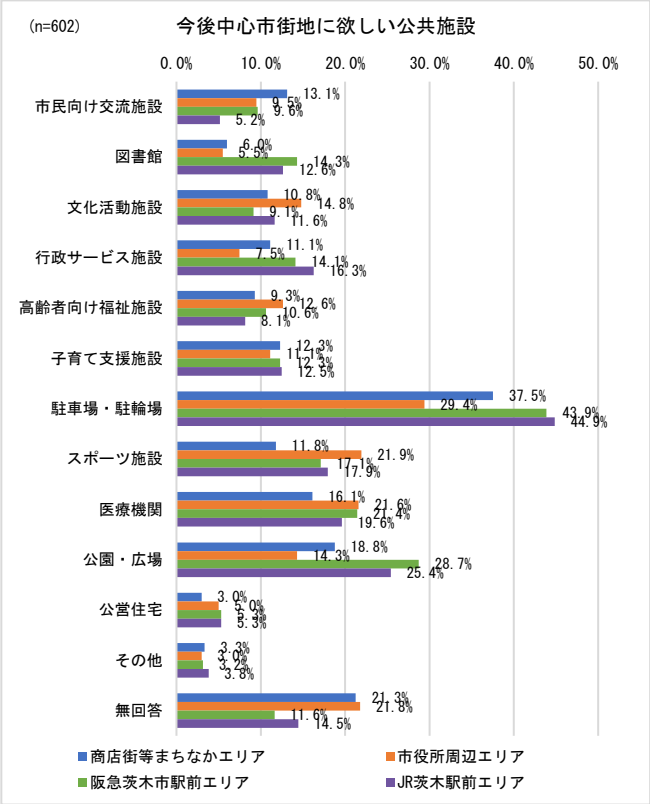


図 12-57 今後中心市街地に欲しい公共施設

期待する賑わいのイメージ

中心市街地の各エリアで期待する賑わいのイメージは異なる

中心市街地内の各エリアにおける、期待する賑わいのイメージをみると、「商店街等まちなかエリア」では、「昔ながらの商店街のレトロで親しみやすい雰囲気を楽しめる」が他のエリアと比べても著しく多くなっている。

「市役所周辺エリア」では、「日常の延長にあるような、ゆったりとした散歩気分を楽しめる」が３割以上、「文化や芸術に触れる機会にあふれている」が２割以上となっており、特に「文化や芸術に触れる機会にあふれている」は他のエリアに比べて突出して多い。

「阪急茨木市駅前エリア」では、「日常の延長にあるような、ゆったりとした散歩気分を楽しめる」、「都会的で流行の先端や目新しことに触れることができる」が共に約２割程度と多い。「昔ながらの商店街のレトロで親しみやすい雰囲気を楽しめる」は１割程度となっている。

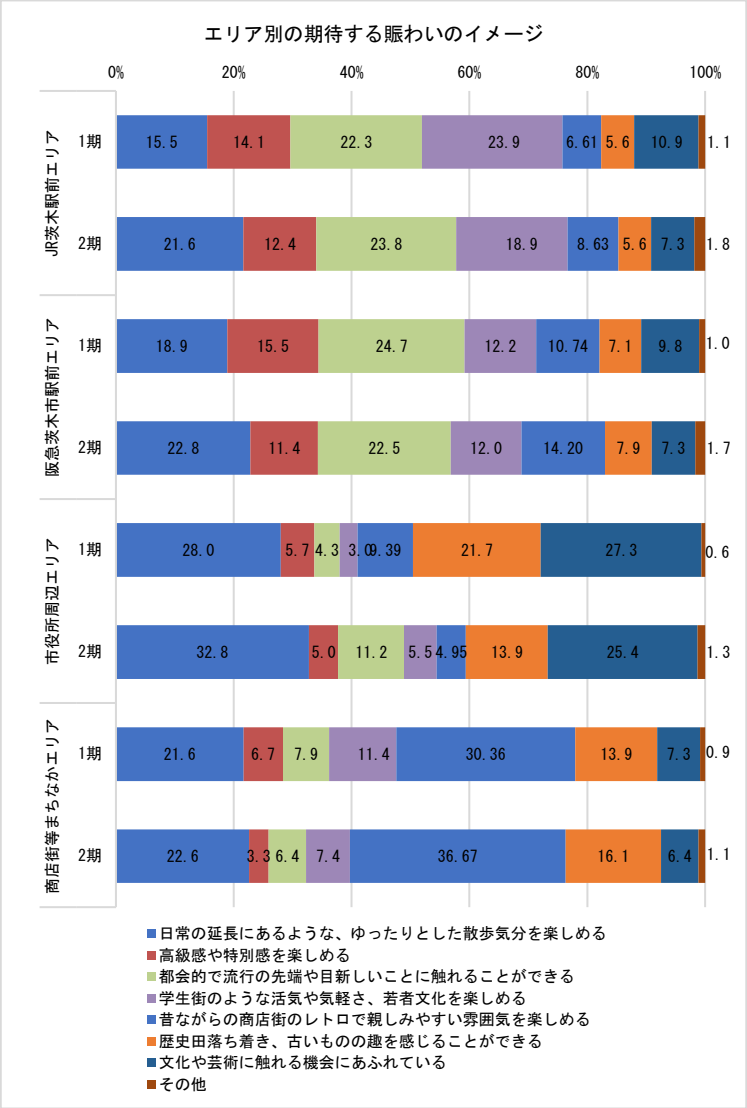


図 12-58　エリア別の期待する賑わいのイメージ

「ＪＲ茨木駅前エリア」では、「都会的で流行の先端や目新しことに触れることができる」、「日常の延長にあるような、ゆったりとした散歩気分を楽しめる」が約２割と多いほか、「学生街のような活気や気軽さ、若者文化を楽しめる」の回答が約２割と他のエリアと比べて多くなっている。

※第１期計画策定時の調査では、同質問を１～３位まで各エリアで回答する形式としていたため、今回調査（２期）と比較するため、１～３位の回答は３つまでの選択の複数回答として集計、各項目の回答数の和を母数として割合を算出した。

ⅲ）今回調査（２期）の集計については、複数回答の質問のため、各項目の回答数の和を母数として割合を算出し、第１期計画策定時と比較できる形式とした。

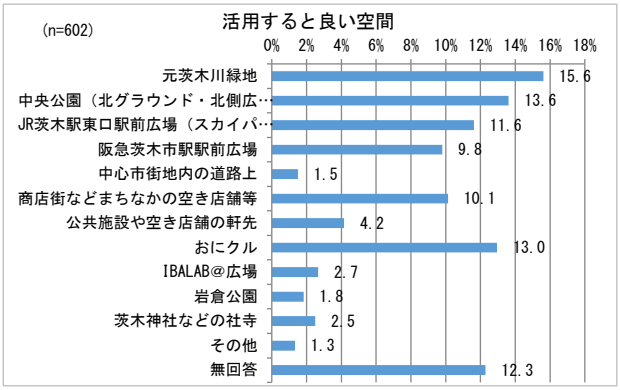
公共空間の活用について

２コア１パークでの公共空間活用に対する市民からの期待は高い
フリーマーケットやマルシェ、オープンカフェ等の商業的要素を含む活用へのニーズが高い

中心市街地の賑わいづくりに向けて、日常的に活用されると良いと思う中心市街地内の空間についてみると、「元茨木川緑地」、「中央公園（北グラウンド・北側広場）」、「おにクル」が上位となっており、続いて「ＪＲ茨木駅東口駅前広場（スカイパレット）」、「商店街などまちなかの空き店舗等」、「阪急茨木市駅駅前広場」が挙げられ、中心市街地の２コア（駅周辺）１パーク（中央公園・おにクル等）を活用することへの市民の期待が高い。

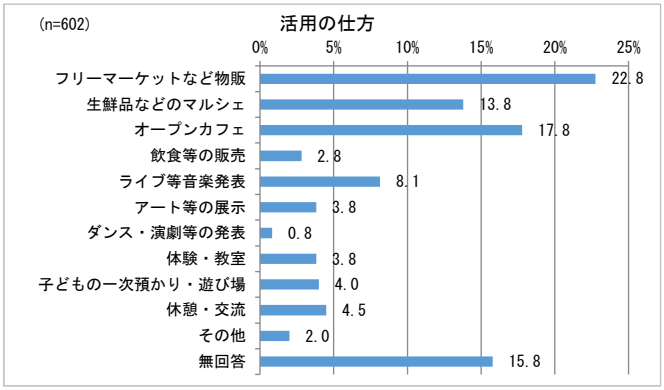
希望する活用の仕方は、「フリーマーケットなど物販」、「オープンカフェ」、「生鮮品などのマルシェ」が多く、商業的要素を含む活用のあり方が多くの市民から望まれている。「おにクル」では「ライブ等音楽発表」が最も多い。

図 12-59 活用すると良い空間

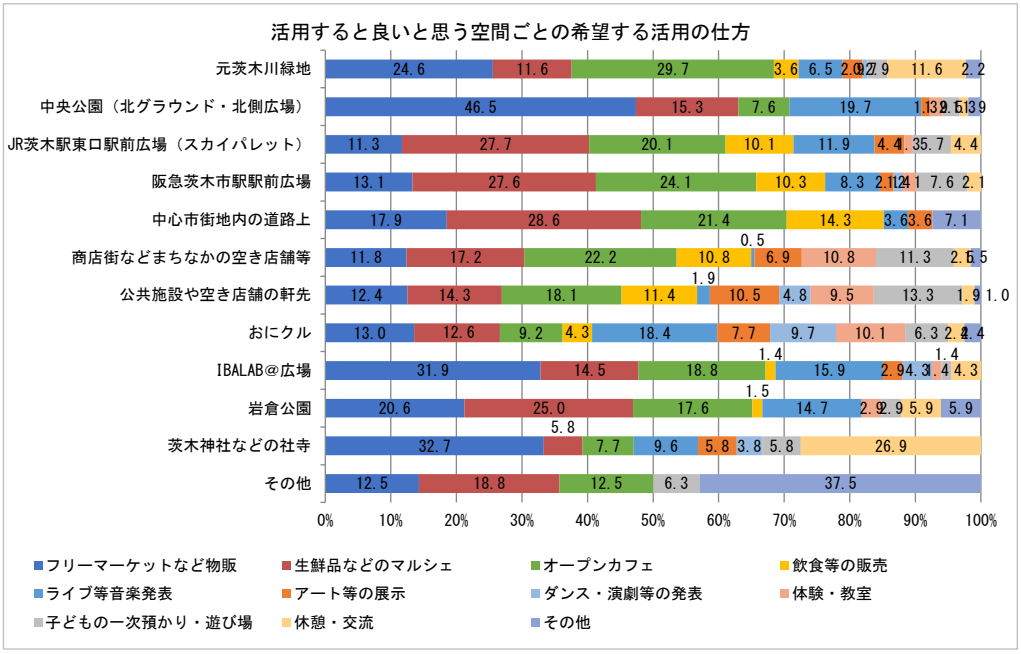


※複数回答

図 12-60 活用の仕方



※複数回答



※「活用されると良いと思う中心市街地内の空間」については複数回答のため、各項目の回答数を母数として「希望する活用の仕方」とのクロス集計を行い割合を算出。

図 12-61　活用すると良いと思う空間ごとの期待する活用の仕方

居心地がよく歩きたくなるまちに向けて必要・欲しい取組（複数回答）

「広場やオープンスペースを増やす」といった滞留性を高める取組、歩行空間の魅力化が上位

「座って休憩したり滞留したりできる広場やオープンスペースを増やす」が最も多く、６割以上から回答されている。次いで、「植栽やサイン、照明、舗装等のデザインを良くして歩行空間を快適にする」と、「車両の進入を抑制する・歩道を広げるなど、歩行者優先の道路を増やす」が約４割となっている。

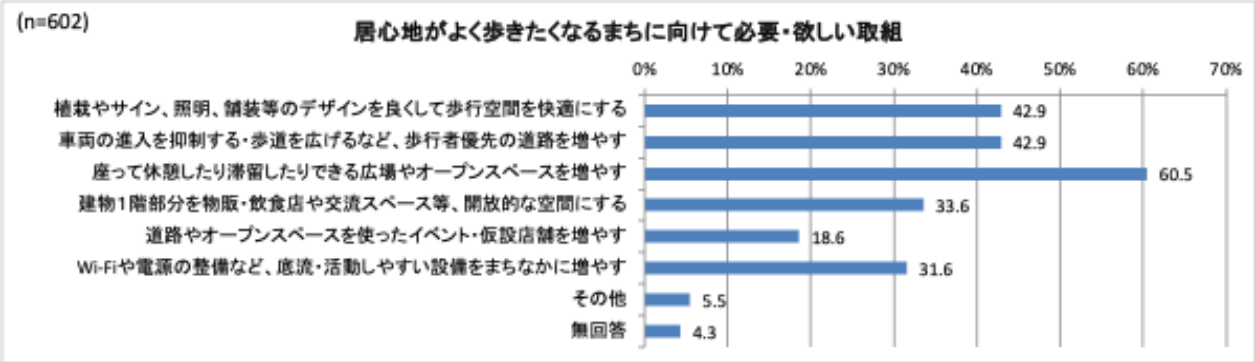


図 12-62　居心地がよく歩きたくなるまちに向けて必要・欲しい取組

交通・移動の円滑化のために必要・欲しい取組（複数回答）

「自転車駐輪場の整備」へのニーズが高い

「自転車駐輪場の整備」が最も多く、約５割となっている。

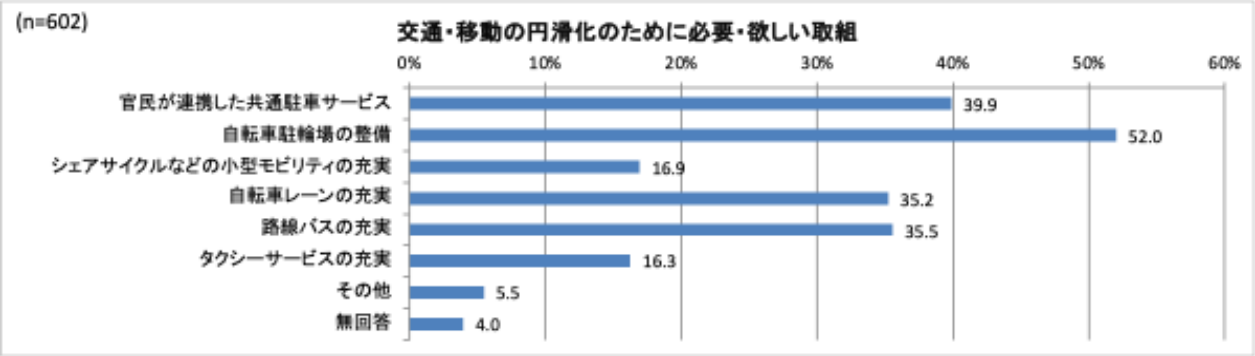


図 12-63　交通・移動の円滑化のために必要・欲しい取組

商業や経済の活性化のために必要な取組（複数回答）

「空き物件の活用促進」へのニーズが高い

「空き物件の活用促進」が最も多く、６割以上が回答した。

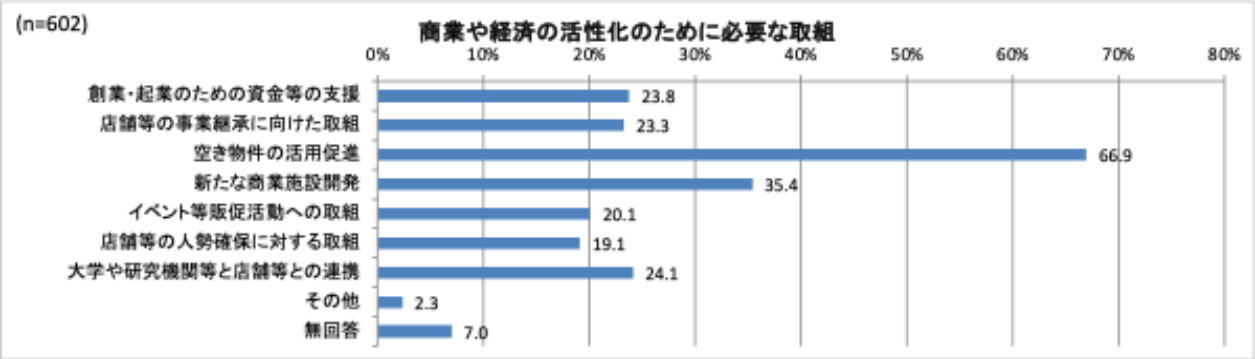


図 12-64　商業や経済の活性化のために必要な取組